

日本生物學會誌

第 21 号



日本生物學會

1985年12月20日

クラゲはPLANKTONであるか

海老人空耳

本稿は企画されている「理論生態学ノート」誌に投稿しようかと思って書き始めたものであるが、余りにも理論的とは思われなくなったので本誌に投稿したものである。快く掲載を認められた会長に深甚なる謝意を表するものである。

Is it "a tale told by an idiot,
full of sound and fury,
signifying nothing" ?

(Macbeth, V(V))

前 白

- 池田湖畔のとある食堂の看板に書いてありました。
「カレー、コーヒーうどん、こいのえさ、あります。」
誰が食べるのかな。
- 京阪電車のある駅に広告がありました。
「□□県ではじめてそば・うどんのイオン化に成功しました。」
どんなになるのかな。
- 姫路の西方、国道2号線沿いのあるドライブインに標語が貼られていました。
「疲れたら、ハンドル離して、一休み。」
怖いですね。
- 京都の中心街のさる高名な洋式料理屋のメニューに載っていました。
「特上ビーフステーキ (但馬肉) ¥□□□□」
?

起

□田□子様

拝復 遅くなりましたが、校正並びに御依頼の原稿をお送りします。このあたりの用語は日本語と英語等との対応が混乱したまま定着して来ておりまして、日本語と英語等とを併せて解説する

となると苦慮いたします。日本語として記述している限りでは取り立てて問題になるところもないようなのですが、英語等と対応させたり混ぜ合わせて用いるとなると、不可避免的に齟齬を生みます。英語等の用語の意味も厳密・忠実に守って書き話すとなると、日本語としては何ともぎこちない感じになって、そんなに堅苦しく言う必要もないのではないかということになるのも一般には一理あるところですが。ただ、同じように使われている異国の用語が実は互いに全く同じ意味ではないのだということが看過されることになって、それはどういうことになるのかと、その点だけが気になる訳です。

たとえば、「ベントス」とか「プランクトン」とかいう語です。これらは、日本語としては、それぞれ「底生生物」・「浮遊生物」と同じもののようによく通用しています。同じもののようにということは、これらを互いに置き換えても文意を損わないということです。では、「ベントス」や「プランクトン」の原語である独語や英語の「BENTHOS」や「PLANKTON」も同列に同じものであるかということ、実はそうはいかない場合が生じます。

「貝類や海鼠類は典型的なベントスです。」

「クラゲは最大の浮遊生物です。」

「最大のプランクトンはクラゲです。」

というような言い方は、よくお目に掛かるところです。しかし、これらの文の「ベントス」・「浮遊生物」・「プランクトン」という語を「BENTHOS」・「PLANKTON」に置換したり、これらの文をその文形の俣で（少々乱暴ですが）英語等に変えると、意味をなさなくなります。例えば、

"The jellyfish is the largest plankton."

とは、英語では先づ言わないでしょう。これに比して、

「海綿は最も下等な動物です。」

"The sponge is the lowest animal."

というのは、おかしくありません。「PLANKTON」は「ANIMAL」と同じようには用い得ない意味を持っているということでしょう。「BENTHOS」・「PLANKTON」という語は、ある場所の底生生物や浮遊生物の全体、即ち集団・群集そのものを指すのが本義とされています。従って、"the largest plankton"とは"最大の浮遊生物群集"とでも言うべき意味になって、それ自体どんなものかを考えたらいいか判然としませんし、日本語で言う"最大のプランクトン"とは全く異なる意味のものである訳です。日本語では個々の生物を指すようにも用いられている語が、対応させられる英語等の語ではそのような意味では使えないものであるということです。

謂はば、平家とか巨人軍とかいった集団名と同列のものと言ってよいでしょうか。

「私は1年北組です。」

というような言い方は、日本語では極く普通で正常であるとしても、その意味するところを厳密に問い直してみると、不正確なところが感じられることでしょう。詰まり、ここは

「私は1年北組の者です。」

「私は1年北組に所属しています。」

と表現すべき意味合いのものだということでしょう。そして、英語では

"The jellyfish is a member of the plankton."

"The jellyfish belongs to the plankton."

というようにしか言われぬ筈のものなのです。しかし、だからといって、日本語で一々

「クラゲはプランクトンの一員です。」

「クラゲはプランクトンに所属しています。」

などと申せば、今や世俗では却って奇異に感じられることでしょう。

日本語の「プランクトン」・「ベントス」は外国語の「PLANKTON」・「BENTHOS」に由来するものではありませんが、含意に於ては既に異質になって定着していると認めざるを得ない状況にある訳で、それを兎や角目くじら立てて言うことはどうなのか、という生きたコトバ論が顧慮される謂もあります。然りとて、「プランクトン」・「ベントス」と「PLANKTON」・「BENTHOS」とを併せて説明するとなると、依然として苦慮せざるを得ない面が残りますし、そのような「プランクトン」・「ベントス」は日本語であって英語や独語ではないのだというお話であります。

御賢察下さい。

敬具

承

隣の研究室の口村さんにこの手紙の写しを見せて意見を問うたところ、直ちに批判が返って来た。

曰く、

「は」は「が」と異なり、主語を表わすものではなく、主題を示すものである。

「花は彼が折ったに違いない。」 = 「彼が花を折ったに違いない。」

即ち、「は」は文章の中の殆どどのような部分であっても取り出して文頭に置き、その部分を文全体の主題として際立たせる働きをする。

そして曰く、

「私は1年北組です」という文章を舌足らずで誤りを犯していると考えるのであろうか。この場合、「私の所属は1年北組です」という文の「の所属」が省略されたと考えられるのではなく

て、「私の所属」というような主語が全て省略され、新たに提起として「私は」が文頭に置かれたと考えられるものであろう。

「僕はカレーだけど、君は。」

「私はスパゲティーよ。」

というような言い方は、主語が屢々略される日本語に於ては誤りではなく、「私は」の「は」が提起の係助詞だから文法上も間違いではない。但し、話の前後の脈絡が判っていてこそ理解され得るという意味で、舌足らずの表現と見れる点はある。

亦、曰く、云々。

転

特急列車などの少し許り上等な列車になると、車内放送で案内がある。

「次に、この列車の停ります駅は、和歌山・御坊・紀伊田辺・白浜・串本・紀伊勝浦、そして終着新宮に停ります。」

「車内販売は、終点天王寺まで販売させていただきます。」

大野晋氏の「日本語の文法を考える」（岩波新書、黄53、1978年刊）には、次のように書かれている。

江戸は神田の生まれだってねえ

というのも、これと同じ例で、「江戸は（ドコカトイウト）神田の生まれだってねえ」と解される。「江戸は」を主格ととり、「生まれだ」を述語ととるからおかしいということになるのである。「江戸は」は決して主格を示しているわけではない。

次の停車駅は石神井公園にとまります

というのも、「次の停車駅は（ドコカトイウト）石神井公園です」といえば、主語・述語は照応する。しかし、ハは主格に限って使われるわけではないから、「次の停車駅は」という題目に対しては主語・述語の関係以外の答えも可能なのであって、説明として「石神井公園にとまります」という表現がなされたのである。”（31頁）

車内放送はおかしくないのである。

「は」に就いては、既に多くの卓抜した国語学者が緻密な検討を加え、広く論議がなされて来ているようで、素人が兎や角講釈するのは、〈エコロジー〉を理解していない人の〈エコロジー〉運動のようなものだとも言われよう。専門家の意見の一つを聴こう。少し長くなるが（著者が引用の短縮・中略による伝意の歪みに大層憤激している節があるので）、本多勝一氏の「日本語の作文技術」（朝日新聞社、文庫版本多勝一シリーズ、1982年刊）から借りよう。

“ さて、日本語の助詞「ハ」は、どのような働きをしているのだろうか。三上氏の多数の著

作のうち『統・現代語法序説』に出ている説明に私なりの補足をしながら解説してみよう。

あらゆる種類の性格の異なる言語の中で、ここでは主としてイギリス語と比べながら検討するが、イギリス語などはあくまで無数の言語の中のヒトツにすぎない。これがとくに論理的でもなければ、とくにすぐれているわけでもない。現代までの言語帝国主義的国際状況のおかげでイギリス語が得ている不当に大きい力関係を考えれば、むしろイギリス語は他の言語より非論理的で劣っていると言わなければ平衡がとれないくらいだが、この際感情に走るのはやめておこう。にもかかわらず、なぜイギリス語を日本語の比較対象に選ぶか。第一にその最大の理由は、日本語文法が西欧語文法に暴行されて出発したという近代の背景があるからである。さきに述べたように、全く異なる統語法、異質の言語体系のために作られた文法を直輸入して当てはめた。日本の場合イギリス語は西欧語の代表格だから、たとえばマレー語やベトナム語と比べて、この問題を検討する上で被告席に立たせるのに適している。第二の理由は、日本語と構文上たいへん違った言語のひとつにイギリス語がある点だ。これはたとえば朝鮮語やアイヌ語と比べるよりも利点が多いだろう。第三に、言語帝国主義における植民地国日本では、フィリピンなどほど徹底した植民地化はまだ進んでいないにせよ、イギリス語（あるいはアメリカ語）が最も普及した外国語とされているために、多くの人に理解されやすい。

まず、次の例文を見ていただきたい。

The man gave the boy the money.

これを日本語に訳すとき、これまでの翻訳の常識では「オトナガ子供ニ銭ヲ与エタ」であった。そして、これが問題なのだが、「オトナガ」を「主語」と規定したのである。しかし、これを「子供ニオトナガ銭ヲ与エタ」としても、日本語ではちっともかまわない。あるいは「オトナガ銭ヲ子供ニ与エタ」でもよろしい。要するに――

オトナガ \\
子供ニ → 与エタ。
銭ヲ /

という関係が日本語なのだ。つまり「オトナ」「子供」「銭」の三者は、「与エタ」という述語に対して平等の関係にある。言いかえれば、この文章は「与エタ」という述語をめぐる三者の関係を示しているのであって、「オトナ」だけとびぬけて重要な「主語」ではありえない。しかしイギリス語では――

The man gave $\begin{cases} \nearrow & \text{the boy} \\ \searrow & \text{the money} \end{cases}$

という関係だから三者は決して平等ではなく、the man が正に主語であり、それは述語のテンス（時制）をも支配して、たとえば三人称単数現在ならsがつく、といった強力な「主述関係」を作る。こういう文法は、なるほど「オトナガ」を強調したいときは便利であろうが単に「与エタ」をめぐる三者の関係を示すときは、逆に不便であろう。いやでも何でも、どうしても「主語」を出して強調せざるをえない。何かを強調してはならぬ関係のときでも、常に何かひとつを強引にひきたてざるをえない文法というのも、ある意味では非論理的で不自由な話だ。気象や時間の文章で it などという形式上の主語を置くのも、全く主語の不必要な文章に対して強引に主語をひねり出さねばならぬ不合理な文法の言葉がもたらした苦肉の策にはかならない。「形式上の it」はイギリス語があげている悲鳴なのだ。フランス語のilやドイツ語のesも同様である。あえて皮肉をいえば、人類の選択しうるさまざまな言語方式の中から、ああいふシンタックスを選んでしまった民族の転尻あわせでもあろう。

そこで三上氏は、日本語に「主語」は存在せず、あるのは「主格」にすぎないと主張する。その主格（オトナガ）は、他の格（対格＝銭ヲ、方向格＝子供ニ）と平等な補足語のひとつにすぎず、文の成文の名前であり、構文論的な概念なのだ。”（144-147頁）

“たとえば翻訳の直訳調がわかりにくい理由を考えてみよう。「甲ガ乙ニ丙ヲ紹介シタ」という文章は、原語がイギリス語である場合、「甲ガ紹介シタ、乙ニ丙ヲ」という語順になっている。これだけが、イギリス語の唯一の語順だ。そこで未熟な翻訳者は、単に述語をあとに移すだけの操作をして「甲ガ乙ニ丙ヲ紹介シタ」と訳す。もちろん文法的にはこれが間違っているのではない。だが、あの第三章「修飾の順序」を思いだしてみよう。

Aが		
私の親友のCに	↘	紹介した。
私がふるえるほど大嫌いなBを	→	
	↗	

これをイギリス語のシンタックスのとおりにならべてゆくと次のようになる。

Aが私の親友のCに私がふるえるほど大嫌いなBを紹介した。

これがすなわち「翻訳調」なのだ。イギリス語のシンタックスを日本語にそっくり移している。いったいどうして、格の順序が別の原則からなっている日本語に、イギリス語の「主語」感覚の語順をそのまま移さねばならぬのか。翻訳とは、二つの言語の間の深層構造の相互関係でなければならない。”（149-150頁）

“日本語で「ハ」にすべきか「ガ」にすべきかといった問題は、このように言葉の死命を制する。だから第一級の文章家たちは、ハとガの使い方が必ずうまく、論理的で、その結果リズムに乗っている。

以上で係助詞「ハ」の題目としての役割と、それに関連する格助詞「ガ」についての「わ

かりやすさ」のための検討を終わる。しかし「ハ」と「ガ」に関する文法的考察となると、たとえばここにあげた三上氏の考え方を全面的に支持する人から、反対に全力を傾注して黙殺を試みる人まで実にさまざまである。素人の私がこの問題に深入りしたくはないが、そのようにまだ評価のわかれていた三上説をここで重点的にとりあげたのは、これまで述べてきたような意味での「わかりやすく論理的な日本語」を考える上で、この文法論はたいへん参考になり、実践的だったからである。私たちジャーナリストのような、文章のいわば「現場」にいる者にとって、自分の毎日書きとばしている日本語の文章がどのような性格のものであるかを知るには、ある仮説が出た場合にそれを徹底的に使ってみることが第一だ。三上氏の「主語廃止論」は、私の考えてきた「わかりやすさと論理性」を実践する上でたいへん役立った。三上文法に対して黙殺する側の文法書もいくつか見たが、これは現場の実践には大して役立たないようい思われた。なぜだろうか。”（157-158頁）

日本語が論理的であるかという点については、異論もある。金田一春彦氏は「日本語」（岩波新書、C93、1957年刊）で言っている。

“日本語に関する評価は、これまでいろいろなされてきた。中で、詩人萩原朔太郎の次の意見あたりは、多くの意見の公約数のようなものだった。

日本語を外国語（特に西欧語）と比較する時、日本語の著しい欠陥は第一に論理性がなく意味の正確を欠くということ、第二に韻律性が稀薄であって、聴覚上の印象が平板単調であるということである。

もっとも、これを引っくりかえすと、イギリスのマック・ガヴァーンの言ったように、「日本語は流暢（flowing）で音楽的（melodious）」（Mc. Govern: Colloquial Japanese）であり、日本文芸学の権威岡崎義恵教授の言うように、「複雑な味や関係をその簡素な構造の中に含ませる機能をもっている」ことになる。”（3頁）

“佐久間朔博士は、（1）や（3）のようなセンテンスの中を分けて、〈品定め文〉と〈物語り文〉との二つにした。題目をあげて、その題目のもとに叙述をするのが〈品定め文〉で大体、ヴァンドリエスの「名詞文」にあたる。題目なしに叙述だけするのが〈物語り文〉でこれは彼のいわゆる「動詞文」だ。 （中略）

ヴァンドリエスに言わせると、センテンスのこの二種類の別は、どの国にもあるという。単語に名詞と動詞に区別のない言語はあっても、名詞文と動詞文の区別のない言語はないだろうとまで言っている。が、ヨーロッパ語などでは、この区別があまりはっきり形の上にあられないようだ。そこへ行くと、日本語では実にこの区別がはっきりしている。「は」という助詞があるからだ。佐久間博士は、この品定め文と物語り文の区別がはっきりしていることをもって、日本語の長所と数えている。博士によると、ヨーロッパでは、この区別がは

っきりしていないために、西洋で発達した形式論理学では妙なことをやっているという。たとえば、

馬が走る。

というセンテンスがあると、これは一つの判断をあらわしたものだとして、

馬は走るものなり。

と改めて論じる、というようなのがそれである。ところが、日本語では、右の例で見られるように、(イ) [品定め文のこと] と (ロ) [物語り文のこと] のちがいがきわめてはっきりしている。(イ)には助詞の「は」が使われ、(ロ)には使われていない。(イ)と(ロ)のうちで(判断を表わす)というべきものは、(イ)のセンテンスだけである。こんなことから佐久間博士は、日本語のこの性質をもって、日本語をヨーロッパ諸語以上に論理的な言語だと考えていいと言った。もし、アリストテレス以下の哲学者の母国語が日本語だったら、ヨーロッパの論理学はよけいなまわり道をしないですんだかもしれない、ということになる。”(184-186頁)

とまれ、有名な「象は鼻が長い」というような文が日本語の正しくも特徴的な構文・表現であることは、疑いのないところであるようである。とは言え、「車内販売は、．．．販売します」式の言い方が全く抵抗を感じさせないかと言えば、何となくこだわりを抱く向きのあることも(少なくとも現代においては)、亦、否定できないところであろう。

「私は、今年の巨人軍は若い人が成長して来ているから優勝間違いなしですよ。」

というような口語もしょっちゅう耳にするところだが、文字にするとどういふ訳か焦ら立ちを感じさせるのは、話の内容の故(!)ではあるまい。科学論文などでは特にそうであろう。

「調査は、各地点で毎月1回種類組成を調査した。」

などと書けば、疑いもなく指導教官か校閲者にボロクソに言われることであろう。

「調査は(ドノヨウニシタカトイエバ)、各地点で毎月1回、．．．」

という意味で正しい日本語であるなどと勢い込んで抗弁してみても、皆まで言わず退けられることであろう。去る日の日本生態学会大会において、

「日本生態学会誌35巻までの編集委員会並びに編集部に関する役員並びに機関は1984年4月改正の会則を適用する。」

という会則の改訂文に対して、直ちにおかしいという意見が出て、直ちに受け入れられた。何かなじまない感じが生まれて来ているのである。(エコロジー)の専門家でなくてもその感覚に秀れてエコロジカルなものが少なくないように、素人の(日本語)使用感覚も亦、無視できないところはあろう。コトバも世の中で生きている。

結

「ハ」が本題ではなく、問題は「プランクトン」であり「PLANKTON」である。巷間世俗に限らず、

「□□湖のプランクトンは動植物合せて200種類を超すが、それらは魚類同様に沿岸と沖に分けられる。」

といった記述は、歴とした学会誌の第一級の学者による論文でもよく目にするところである。

「動物プランクトンが何を食うかよく調べられていない。」

といった表現も稀ではない。ここでは明らかに、日本語文法に於ても、「動物プランクトン」が主語であって、それが「食う」のであるから、これは「ZOOPLANKTON」ではあり得まい。そう言えば、「プランクトン図鑑」などどいうのもこれに類している。「PLANKTON」の日本生まれの隠し子「プランクトン」は、今や認知されたとすべきものらしい。

その出生の事情は詳らかでない。察するにこういったところであつたらう。

「ヘンセン氏ハ漁業上探索ノ目的ヲ以テ数年来水面種族ノ状況ヲ研究セラレ海産生物界ニ「プランクトン」（假ニ可驚物界ト譯ス）ナル名稱ヲ附セリ。．．．．可驚物界ニ屬スル動植物ニシテ今日ニ至ルマテ發見セラレタル屬ノミニテモ其數實ニ夥シク其大小ノ如キモ亦區々ニシテ下ハ直徑僅ニ一「インチ」ノ二萬五千分ノ一ヲ越エサル極微ノ單細胞海藻類ヨリ上ハ巨大ナル魚類及游水類ニ達セリ」（岩川友太郎、1893、167-168頁）

「淡水生物（Limnobiös）陸上生物（Geobiös）に對し海産動物を總稱してHalobiösと云ふHalobiösを住所の有様及び之に適合する種々の性質により分ちて三種とす、素より判然たる區域は立て難しと雖とも生活法の上より見れば隨に三種のTypusあるを以て之に對する區分をなさざるべからず、曰くBenthos（底住生物）曰くNekton（游泳生物）曰くPlankton（浮流生物πλαγκτοςより來る）之れなり」（丘淺次郎、1893、408頁）

といった知識に触れたのが抑々の馴初であつたらうか。そこで、たとえば

「實ニ海洋ト呼ベル廣大無邊ナル水界ハ只ニ水液ノ一團タルノミニ非ラズシテ其中ニ生物ノ棲息スルコト陸地上ニ於ケルト異ラズ。．．．．海洋中ニ於ケル植物ニハ二種ノ判然タル區別アリ第一ハ。．．．．多細胞。．．．．第二ハ單細胞。．．．．後者ハ淺海ノ沿岸又ハ其海底ニ繁殖スルノミナラズ大洋中ニ懸遊スル所謂おらんくんとん（懸遊生物）ノ大部分ヲナスモノトス」（飯塚啓、1907、23-26頁）

と関心が深まって行く。益々知って来ると、

「「プランクトン」には動植物の何れも多種多量に出現する。．．．．動物性「プランクトン」は其形態が變化多く複雑であるのが特徴で種類は非常に多い。」（小久保清治、193

2、 3頁)

「プランクトンの中には海中から出すと忽ち崩壊するものがあるから、是等は其場で観察せねばならない。」(杉崎浪江、1931、3-4頁)

などと打ち解けて語り合う。時には驚いた容子で、

「オヤマア、あの大きなエチゼンクラゲもプランクトンなのかエ。」

「そうサ、身を水の流りに任せて浮世を暮らす生きものは、皆そのプランクトンなのサ。」

「トキニお前さまはどうなのだエ。」

と糾しもする。

「大きなエチゼンクラゲも(ドノヨウナモノデアルカトイエバ、ソノゾクスルタゲイトイエバ)プランクトンなのか。」

「これらの生きものは(ナニモノデアルカトイエバ、ドノヨウナタゲイナノカトイエバ)プランクトンだ。」

と言う意味のことを、日本古来の様式に従って表現した。それが彌漫し始めた西欧風の感覚で理解される。語法の交錯の中で、用語に歪みが発生する。

「クラゲはプランクトンである。」

とは、純潔日本語的な言い方として理解すれば、

「クラゲは(ドノヨウナモノデアルカトイエバ、ソノゾクスルタゲイトイエバ)プランクトンである。)

だということでおかしくないということになるのであろう。それが、

「ソラ御存じのごとく我輩は遵直方正の人間だろう。」

「叔母はああいう人だ。」

「実に課長は失敬な奴だ。」

などといった表現と重なり合って西欧風に理解されると、「クラゲは」が主語で、「クラゲ」=「プランクトン」というように解されたことであろう。詰り、「プランクトン」という概念が人間とか生物といった概念と同列に受け入れられる道を開く。西欧語原語の概念に於ける限定——群集・集合を指す——という点は、この類の抽象的な概念に乏しかったとされる日本語では保存され得なかったということであろうか。

そして、敢てここでの「ハ」に言及するならば、西欧語の文法に依って暴行されたと言うより科学論文との最初の交渉を西欧語と持ったが故に、不躰で時には強引であっても主語の明示というやり方の厳格さの虜となり、責任主体や対象を明確に指示するという目的に対しては、殆どどんなものをも許す寛容な「ハ」という係助詞による題目・主題の提示という大様なやり方が、頼りなく感じられたのであろう。そこから、極く自然な成り行きで、科学論文に於いては文法の私

生児として「ハ」に「ガ」とは意味合いの異なった主語指示の役割を求め生ませたということであらうか。

しかし、本来本当はどうだったのであろうか。疑り深い御仁や知りたがり屋の誰しものが問うところである。「本来本当」というところを「原義」で置換するのを原典法という。浮游生物を本格的に研究したのはMüller (1845-1855) が最初だとされている。彼はそれを「AUFTRIEB」(あるいはPELAGISCHE AUFTRIEB)と呼んだ。これに代わる用語として「PLANKTON」を導入したのはHensen (1887) であるが、その原著を直接見ることが出来ないので、Haeckel (1891) やBoysen Jensen (1911), Petersen (1911) が引用しているところから借りようそれによると、「PLANKTON」という用語の意味するところは

《Alles, was im Wasser treibt, einerlei ob hoch oder tief, ob todt oder lebendig》
と説明されている。この「alles」は全体を一体として指しているもので、その構成員の全ての個々を指すものではないことは、

” Die Fische gehören daher höchstens in der Form von Eiern und Brut zum Plankton, aber nicht als erwachsene Thiere; die Copepoden, obgleich lebhaft schwimmend, werden doch willenlos mit dem Wasser fortgerissen, und müssen daher zum Plankton gerechnet werden.” (1頁)

という、それに続く記述からも明らかであらう。

「PLANKTON」に対置して「BENTHOS」や「NEKTON」の概念・用語を提唱したHaeckel (1891) は、その時に次のように書いている。

” Wenn wir unter dem Begriffe des Halobios die Gesamtheit aller im Meere lebenden Organismen zusammenfassen, so zerfällt diese zunächst in ökologischer Beziehung in zwei grosse Hauptgruppen, in Benthos und Plankton. Benthos nenne ich, im Gegensatze zum Plankton, alle nicht schwimmenden Organismen des Meeres, also alle Thiere und Pflanzen, welche auf dem Grunde des Meeres sich aufhalten, entweder festsitzend (sessile), oder der freien Ortsbewegung fähig, kriechend oder laufend (vagile).” (250頁)

そして、随所に

” Die tiefste Abtheilung dieser zonarischen Fauna bildet das bathybiische Plankton (oder der profunde Auftrieb), d.h. die Thiere der Tiefsee, welche Zum bathybiischen Plankton gehören viele Phaeodarien, einige Medusen und Siphonophoren,

viele Tiefsee-Crustaceen," (254頁)

のような言い廻しが見られるところからも、「PLANKTON」や「BENTHOS」が「総称」であり「群集」を意味していることが知れよう。しかし同時に、" d.h. die Thiere der Tiefsee " というような挿入のコトバや、

" Wenn man in dieser Weise mit Hensen den Begriffe des Plankton beschränkt, so muss man dem passiv treibenden Plankton das active schwimmende Necton entgegenstellen."

(251頁; この文では Nekton ではなく Necton と綴っている)

" Zonarisches Plankton nenne ich diejenigen Organismen, welche" (254頁) といった表現は、その点を曖昧に受け取らせる余地を与えたことであろう。

このような原義に基づいて、「PLANKTON」の独語による今日的な定義は、たとえば次のように与えられている。

" ein Sammelbegriff für alle im Wasser schwebenden Organismen, die keine grosseren Eigenbewegungen ausführen " (Lenz, 1968, 48頁)

仏語 (plankton) ではたとえば

" l'ensemble des organismes flottants qui se laissent transporter par les courants auxquels ils sont incapables de résister " (Dajoz, 1972, 356頁)

のようであって、いずれも「総称」・「群集」・「集合」という点は明確にされている。英語 (イギリス語のこと) での伝統的な用法はこのような原義をよく辨えている。それを示すいくつかの例を示そう。

" These animals which appear for only a short period in the drifting community form the temporary members of the plankton, and" (Russell & Yonge, 1936, 123頁)

" After leaving the plankton the young may settle on the fronds of Laminaria and" (Yonge, 1949, 120頁)

" The larvae spend a long time in the plankton before settling in" (同上, 122頁)

" Actually when they are very young, the baby fish are strictly speaking part of the plankton too," (Hardy, 1958, 5頁)

" Then, occasionally in the coastal areas, the plankton may be invaded by some of the bottom-living bristle-worms which" (同上, 145頁)

持って廻った言い方のようにあるが、それは日本語風の

" These animals are the temporary plankton. "

" The baby fish are the plankton. "

が「PLANKTON」の語義上成り立たない故の当然の帰結である。

だが、それも英語においても祖先形になりつつあるのか。英語圏の国々の最近の出版物の論文には、多彩な用例が見受けられる。

" Due to the vertical migration of some zooplankton, it is also conceivable that this mechanism can be of profound biological significance. "

". . . and we should therefore include the effect of grazing by zooplankton. "

" For animals longer than ~1 cm (and perhaps eventually for the smaller zooplankton as well), acoustic scattering is an attractive alternative for two reasons. "

中にはこれと思われるものもある。一つには、米国を中心に愛用されている名詞の連用の多用が、語義の鈍化や発散を招くらしいからである。実際、たとえば " plankton patchiness "とは一体何なのか、群集の中の話なのか、それは群集の中のことと見うるのか、群集の間のことなのか。—— 昔の用法が弱屈だったのよ。学問・研究が分化して忙しくなると面倒なことには構ってはおれない。鍋でヨオ飯をヨオ炊いたっていいジャンカ。ソリヤアマア、好きなようにしんさったらええんじゃけど、そしたら鍋が釜になるゆうことになるんですかノオ。ソオヤヨ、ばらばらにしても鎖の環はやっぱり鎖や言うんかノ。ホトラ、エビさんがタイさんに食われはるんを食物(連鎖)言うたらあかんのやろか。旧来の陋習に囚われて箸の上げ下ろしに小言を食わせるようなこむつかしいコトバ論議に何の益がある。当座に通用させることが肝要。OLD, BYE, LET, GOTO、. . . レッツゴーレッツゴースミスレッツゴースミスオー。ハテ、スミスさん何とする？レッコーレッコースミスレッコースミス。オーノー。閑話休題。

最近の英語圏の教科書や辞典では「PLANKTON」に関連した用語の解説を次のように与えている。夥多なので恣意的に引用する。直截平易を求めた記述から原意がどれ程汲み取り得るであろうか。

" plankton: the floating and drifting organisms in the water whose movements from place to place are due to the movements of the water rather than to their swimming " (McConnaughey, 1970, 372頁)

" ultraplankton: planktonic organisms less than 5 μ in length or diameter " (同上, 374頁)

" plankton: Those organisms free-floating or drifting in the open water of the oceans having their lateral and vertical movements determined by water motion " (Nybakken, 1982, 418頁)

" zooplankton: Planktonic animals " (同上, 421頁)

" plankton: The marine or fresh-water plants and animals drifting with the surrounding water, including animals with weak locomotory power " (Kenneth, 1963, 447頁)

" plankton: Those organisms that are unable to maintain their position or distribution independent of the movement of water or air masses; see Appendix 9 for size categories; cf. nekton " (Lincoln, Boxshall & Clark, 1982, 194頁)

" plankter: An individual planktonic organism; phytoplankter; zooplankter; plankt, planktont " (同上、193頁)

これでは「PLANKTERS」=「PLANKTON」で、「PLANKTER」は単数形、「PLANKTON」は複数形であるとの誤解を生みかねまい。

某県教育委員会が著わした「生徒指導の手引」には、「服装の乱れた生徒や、頭髪を染色したり、パーマをかけたりしている生徒の対する指導は、どのようにすればよいか」と題した一節の中で、次のように述べられている。

「服装の乱れ等は、学習不振による劣等感から派生した自己顕示欲の表れである場合が多いので、単に服装・頭髪を社会通念上にてらして改めさせるだけの指導にとどまらず、学習不振を解決していくための具体的手だてや、家庭での学習生活の望ましい在り方などについての指導をする必要がある。」

コトバならどうする。乱れたのか、乱したのか、はたまた生きていいのか、生きすぎか。

後白

極く最近の某大新聞に次のような解説が載っていた。

「バイオマス : 原語は英語で一般には“生物資源”などと訳されている。つまり、生物を資源として、エネルギーを製造し、利用すること。例えばサトウキビやトウモロコシからアルコールを作ったり家畜のふんなどの農業廃棄物からガスを作る、. こんご、企業化も活発になりそうだ。」

“つまり”と言うが完璧に“詰まらない”。否、これは何か深謀遠慮の魂胆の故にちがいない。

謝辞

本稿原稿を読んで冷徹な批判を下された、隣の研究室の□村さん、□□大学の□□部教授、□□書店の□藤さん、□□□研究所の□野さん、並びに本稿に至る契機を与えられた□□□□同人社の□田さんに、その名を記して（却って迷惑となることを慮って特に名を伏せる）厚く御礼申

し上げる。老いの一徹から御注文の極く一部しか容れなかったことを深謝したい。尤も公正さのために申し添えるならば、御注文にも老いの一徹に近い類があった。

引用文献（日本語と外国語の別に、年代順に記してある）

岩川友太郎（1893）． 海洋生物學の沿革（二）． 動物學雜誌、第5卷、167—171頁．

丘浅次郎（1893）． 海中生活一斑． 動物學雜誌、第5卷、405—410頁．

飯塚啓（1907）． 海産動物學． 博文館、東京． 3+29+655+29頁、図版1．

杉崎浪江（1931）． 臨海實驗海の動物の觀察． 綜合科學出版協會、東京． 2+12+139頁．

小久保清治（1932）． 浮游生物分類學． 厚生閣、東京． 5+394頁、図版34．

金田一春彦（1957）． 日本語． 岩波新書、C93、岩波書店、東京． 224頁．

大野晋（1978）． 日本語の文法を考える． 岩波新書、黄53、岩波書店、東京． 222頁．

本多勝一（1982）． 日本語の作文技術． 文庫版本多勝一シリーズ、朝日新聞社、東京． 332頁．

Müller, J. (1845-1855). Ueber die Larven und die Metamorphose der Echinodermen. Abhandlungen der Berliner Akademie der Wissenschaften.

Hensen, V. (1887). Ueber die Bestimmung des Planktons, oder des im Meere treibenden Materials an Pflanzen und Thieren. V. Bericht der Commission zur wissenschaft. Untersuchung. der Deutschen Meere in Kiel.

Haeckel, E. (1891). Plankton-Studien. Jenaische Zeitschr. für Naturwissensch., Bd. 25, 232-336.

Petersen, C.G.Joh. & Boysen Jensen, P. (1911). Valuation of the sea. I. Animal life of the sea-bottom, its food and quantity. (Quantitative studies). Report of the Danish Biological Station to the Board of Agriculture, No. 20, 3-81, Tables I-VI, Charts I-III, Plates I-VI.

Russell, F.S. & Yonge, C.M. (1936). The Seas. Our Knowledge of Life in the Sea and How it is Gained. Second Ed. Frederick Warne & Co. Ltd., London. xii+379 pp., 127 Pls.

Yonge, C.M. (1949). The Sea Shore. Collins, London. xvi+311 pp., 40 Colour Pls., 32 Pls.

- Hardy, A.C. (1958). The Open Sea. Its Natural History: Part I, The World of Plankton. Revised Ed. Collins, London. xv+335 pp., 24 Colour Pls., 24 Pls.
- Kenneth, J.H. (1963). A Dictionary of Biological Terms - Henderson. Pronunciation, Derivation, and Definition of Terms in Biology, Botany, Zoology, Anatomy, Cytology, Genetics, Embryology, Physiology. Eighth Ed. Longman, London. xv+640 pp.
- Schlieper, C.(Herausg.)(1968). Methoden der Meeresbiologischen Forschung. VEB Gustav Fischer Verlag, Jena. 322 pp.
- McConnaughey, B.H. (1970). Introduction to Marine Biology. C.V. Mosby Co., Saint Louis. x+449 pp.
- Dajoz, R. (1972). Precis d'Ecologie. Dunod, Paris. x+434 pp.
- Steele, J.H.(Ed.)(1978). Spatial Pattern in Plankton Communities. Plenum Press, New York. ix+470 pp.
- Nybakken, J.W. (1982). Marine Biology. An Ecological Approach. Harper & Row, New York. xvii+446 pp.
- Lincoln, R.J., Boxshall, G.A. & Clark, P.F. (1982). A Dictionary of Ecology, Evolution and Systematics. Cambridge Univ. Press, Cambridge. viii+298 pp.

(オワリ： は. え.)

廣作会長・取締役談話

取締役「会長、また不名誉会員からの投稿ですね。」

会長「うん。」

取締役「不名誉会員からの投稿があるというのは名誉なことなのでしょうか。」

会長「迷惑やないやろ。」

取締役「不名誉会員はみな仮名ですね。」

会長「たいがい凶状持ちやからな。」

取締役「標題にまで外国語が使っておりますよ。投稿規定の冒瀆ですね。」

会長「こ奴はな、昔から日本語が下手でな、外国語の助けを借りんとまともに書けんのや。捨てておけ。」

取締役「無頼を放置してよろしいのでしょうか。第一、会員台帳によると、この不名誉会員は不名誉会員費不払の不良不名誉会員ですよ。」

会長「原稿と一緒に送ってきよった。投稿せなんたら永代不納御免の不名誉会員でおれたかも知れんもんをな。不問な奴っちゃ。」

取締役「不可不でしょう。」

会長「だがな、飲み屋のツケの時効が1年やそうな。そうか。」

取締役「会長、どうだか知りませんが、学会は飲み屋と同列だと言うんですか。」

会長「最近の学会はやな、赤の他人とコンピューターに事務を任せたお陰でな、3年分会費を滞納するとどんな大物会員でも機械的に除名退会になって、後腐れのう消されてしまう怖いところや。それで縁が切れて、また1年分の会費を払うて入会する。我が日本生物学会に限ってそんな非情な抹殺なんかせん、何時迄も忘れんと人間味溢れた運営をしとるわな。が、まあここんところは芸術的飛躍でな。」

取締役「それは何ですか。」

会長「昔々な、時の京都大学理学部長石橋雅義先生が、硬い堅い自治会幹部学生を諭して宜うたお言葉や。」

取締役「甘いんじゃないですか、最近の会長は頼に。」

会長「やはり上品に老けんとな。」

取締役「それも時の京都大学理学部長石橋雅義先生のおことばですか。」

会長「かの進化学者の徳田御稔先生の述懐や。知らんか。」

取締役「誰が知るもんですか。著作集にもないような話を。」

会長「わしが本人の口から直々聞いたんやから間違いないで。活字になってなんたら信用でけんか。」

取締役「コンピューターの磁気テープやディスクを見たって、何も判らんでしょう。」

会長「そらそうや。あれ信頼する奴の気が知れんな。」

取締役「だけど、ワープロっていうのは便利がいいようですよ。この原稿もワープロで書いてありますよ。それに、コンピューターをいじると眼は悪くなるけど老化を防ぐそうですよ。会長もどうですか。」

会長「そんなことしてみ。目付きが悪うなって上品に老けられへんやないか。」

取締役「老けたいんですか。」

会長「年を取るのは自然の摂理や。上品かどうかは人為や。まちごうたらいかんで。」

取締役「それは巷で言うアガッテなんぼというところですよ。」

会長「そう言うたら上品と言うには程遠いな。」

取締役「シェークスピアの作品にだって ” All's Well That Ends Well ” という題のがありますよ。」

会長「シェークスピアを出したら上品になるゆうもんじゃないで。こ奴の話を見てみ。」

取締役「当たり前の事かも知れませんが、言わなければ分からないでしょう。それに、引用や用例で根拠や状況が示されているのは、悪いことではないでしょう。」

会長「そこやがな。資料や事実や言うて思想が貧困になってしまう。かの徳田御稔先生がな、大英博物館が出した解説書を一目見てな、この本は精神が悪いと片付けた。それや。」

取締役「今度は精神ですか。ああ言えばこう言う。」

会長「それやったら政府に負けるで。経費節減のため国産車を買え言うというて、外国と摩擦がから外車を買う言う。」

取締役「悪いようにしないから正直に自白して楽になったらどうかと誘って、正直に自白したらきっちり落とし前を取る。」

会長「ヤクザの論理というやっちゃ。大学の先生もよう使こうとる。覚えといた方がええで。」

<< 生物学誇大事典 >>

しっぽ (尻尾)

頭の後から肛門までを胴といい、肛門から後を尻尾という。魚でもイモリでもトカゲでも、さらにライオンにいたるまで、セキツイ動物はすべて尻尾を持つ。一方、ミミズでもハチでもワラジムシでも、肛門は体の後端に開き、したがって尻尾を持たない。故に尻尾こそセキツイ動物の象徴である。この象徴を失なったセキツイ動物が、カエルと人間である。失なうには理由があった。カエルは跳ぶときに邪魔になったためであろう。では、人間が尻尾を失くした理由は何であろうか。恐龍を見れば判るように、ハ虫類までは尻尾が強大で武器に使ったりしていたが、ホ乳類になると細くなり、全く別の用途に使用されるようになった。それは、感情の表現である。イヌはうれしい時尻尾を振り悲しい時尻尾を垂れる。人間はさらに言葉を発明し、意識を表現できるようになった。ところが、感情と意識とは往々にして矛盾を生ずる。その矛盾を解決するために、人間は尻尾を失くしたのである。

例 外 人 生 (2)

不 名 誉 教 授

“国破りて山河あり” 京都は金沢とともに戦災を免れた土地。ふがいなくも生き、その後れた青春の残照が今もなお片隅に焼きついている戦前の学生生活。その一面を追ってみることにする。

京都のよさは、私のように田舎から出てきた者には、四条通りの繁華街からすぐ向うに“ふとん着て寝ているような”なだらかな山なみの見えることである。

この東山にかすみがかかるところ、私は、さきに山陰の高等学校を親に黙って受験した時唯一の助言者となってくれた、父方の叔父の家に下宿することになった。叔父は市営バスの課長になっていた。いつも不肖の弟くらいにしか思っていなかった父は、さぞかしあの世で安心していることだろう。家は鳥丸七条の警察の近くで、物産館とっていたデパートがすぐそこに見えた。大学へは鳥丸七条から東山線で銀閣寺行きの電車で通った。久方ぶりの制服に初めての角帽はテレ臭くていやだった。それでも義叔母の、“かっこいいやおへん”といて送り出してくれた声が、まだ耳の底に残っている。

大学に入る前から私の心の中にいつもわだかまっていたものは、健康状態もさることながら、同級生となる人達との年令的なギャップの結果、この例外学生が果して通じ合えるのかどうかの疑問であった。毎日講義を受け、ノートし、時にはサボってチョッピリ後ろめたさを感じつつも友達とより自由さを感じずる気分、私は松江時代を懐しく思い浮べたが、学生生活に遠ざかっている今の私にそれが望まれるであろうか。

当時、動物学教室は仮りの校舎で、本部本館前の古いレンガの建物だった。何月何日に入学の通知を受けたのか、入学式は、あったはずだが、出席した記憶も全くない。あっても欠席したのだろう。何だか無我夢中であつたらしく、気が付いたら古びた建物の中で顕微鏡をのぞいていた、といった感じであった。

一滴の水の中に細い線維を入れゾウリムシを動きにくくしてスケッチするわけだが、私にはなかなか思う通りに書けなかった。ようやく書いて次のプレパラートを見ようとしていると、近くで“早くプレパラートを出しなよ”という声が聞えた。今やっとな顕微鏡の焦点を合せたところである。私はおびえたような気になり、どうもいけないと思った。

他の4人は黙って顕微鏡を見ていた。同級生は私を入れて5人、外に支那からの留学生Ge君1人、合わせて6人である。Ge君は別として、他の4人はすでに互いに紹介がすんでいて名乗り合っ

ていた気配が感じられた。では、その間に私は一体何をしていたのであろうか。まるで記憶喪失のごとく、いくら思い出そうとしてもその期間は抜けている。病氣した記憶はない、もちろん名乗り合った記憶もない。その間1～2日、あるいはそれ以上、何かの事情で欠席していたのだろう。その次の実習は、吉田神社の裏手、雑木林の中で枯木の切り株の根元を掘って、その腹中に寄生している織毛虫を観察することであった。この吉田山へ行く途中で、一番年長者らしいIn君と話したが、最初の同級生とのつき合いであった。この時の指導者は、新任の助手SI氏であったと思う。

こんなことがあってから数日たって、私ら同級生は、留学生のGe君も含めて6人、分類学のKm教授の自宅に招待された。北白川の疎水沿いにある欧風の立派な邸宅は、入るのにちゅうちょする位だった。広い芝生に面したベランダに案内されたが、もうみんな来ていた。奥さんがサンドイッチ、だったと思うが、を持って来られ、それを食べながら、学校に慣れたか、とか、何かやりたく思うことがあるか、など聞かれたと思う。芝生の向うに別むねがあって、それが園丁の住居だと聞いた時には驚いた。温室には遺伝の実験のためにヒメダカが飼ってあるそうだ。教授は大体万遍なく一同に話を向け、留学生にも話しかけたが、彼はほとんど日本語はできなかった。

そのうち私はトイレへ行きたくなかった。相当我慢していたのだがとうとうたえ切れなくなって、ちょうど奥さんが来られた時その旨を述べ、案内してもらった。洋式便所というものは、松江高校で外人先生用のものが一個所あって、それをドアのすき間から少し見ただけの経験しかなかった。きれいなニスぬりの、焦茶色がピカピカ光った器に、どうして用を足していいのか、大いに困惑した。上ぶたは何かあげたが、その下の馬てい形のものもあげなければならぬものとは気が付かなかった。いかに周囲を汚さぬように、我慢の限界まできていた状態を解決したが、察してもらいたい。

ここで同級生を紹介しておくことにする。まず、吉田山で話す機会をもったIn君だが、彼は私より3才位年長だった。これを聞いて私の頭から、何か重いものがスーッと抜けていくような気がした。名古屋の第八高校から東大経済を出て、数年岐阜大垣で会計士をやっており、その間しばらくドイツへ行っていたことがあると聞いて驚いた。その後彼とはよく、北門横の進々堂へお茶をのみに行った。大垣には奥さん、子供がいて、単身赴学である。狩猟が好きで、そのうちどうしても動物学がやり度くなって再入学してきたとのこと。外国旅行といい、単身赴学といい、私には思いもよらぬことだった。しかし、鉄砲から動物学への進行は、私の狸飼いとある通じるものがあった。

Hm君、信州松本高校出身、1～2年おくられているらしい。彼も私の心を安堵させてくれた1人である。言葉数の少ない、おとなしい男だが、すぐどこかで流行歌を覚えてきて歌っていた。

Kk君、彼も、自分では言わないが、浪人の経験があるらしい。鹿児島七高出で、一番よくしゃべった。小さい時からこん虫採集が好きで、動物はよく知っていた。小柄で肥って腹が出ているので、真っ先にIn君は彼を大腹君と呼んだ。最初の実習で私にプレバートの催促をしたのは彼であった。

最後に、大阪高校から現役で入った、一番若いのが Os 君である。大阪の金持の御そう子らしい。In 君とはだいぶん年の差があるので、最初はただのボンボン扱いをしようとしたが、そんな扱いに黙って屈するような男でないことは直ぐ理解できた。

もう1人、支那留学生の Os 君だが、何才位か聞いたことがないのでわからない。北京大学を卒業したとも、中退したともいわれていたが、とにかく北京大学にいたらしい。言葉が不自由なためほとんど話し相手はなかった。毎日、生態学の Kw 教授の著書、「陸水生物学」を図書室から借り出して、図のところを懸命に写していた。彼と住いが同じ方向のときがあったので、帰りによく一緒になった。支那との戦争がエスカレートしようとしていたころなので、彼は英語と不十分な日本語を混ぜて、日本が支那を侵略しようとしているとさかんに主張していたようだったが、意味が十分に通じないものだから、しまいに度々もどかしそうな顔をして、手の指先を熊手のように曲げ、ひっかく手つきで侵略のセスチャーを示したことをよく覚えている。私の方も、自分の英語が彼に満足のゆく程伝えられないので、もどかしい思いをしたことがあった。私は丁種だから支那の土地を軍力で荒すことは毛頭ないはずだが、軍人ときくと直ぐあの忌わしい徴兵検査のことが思い出されて不愉快になる。こんなことでこの留学生にいたく同情した。そのうち、彼の祖国からの送金が途絶えがちだといううわさを聞くようになってから聞もなく、彼の細面のさびしそうな笑顔を教室で見ることはできなくなった。

支那ではすでにこのような不幸が起こっているのに、我が教室ではまだ平和そのものであった。

Si 助手の実習を何回かやっているうちに、実習室を戸だなで仕切った向うの部屋で、2回生の発生学の輪読の声が聞えてくるようになった。フッキラ棒な助手の声がして、学生はだいぶんやりこめられているようだった。来年はこちらもあのようにやられるのかと思うとユウウツになってきた。

隣の声は何回か聞いているうちに、北門を入ったところにできた新館の動・植物学教室へ移った。私等は何の手伝いもした覚えはないが、知らぬうちにちゃんと整備されていた。

新館へ入った時、3階の角にある Ok 教授の部屋の前に一同が集められた。“今年度は回り持ちで、やり度くない主任をやることになった。こんな時何か言わねばならないのだろうが、別に言うことも考えつかないので、これで終りにする”と、こんな調子であった。その後、Ich 助手が必要な部屋をまわって説明してくれた。1回生の控室は、常時使われる分類・遺伝の実習室であった。ここでは隣室の輪読の声など聞えてこなかった。図書室は2階にあった。ここでは書籍、雑誌類の説明、借出しのルールなどの説明があって、それぞれの本を見てまわった。ここで唯一記憶に新しいのは、Ich 助手が立ち止って1冊の厚い本を指して、“これ (Geschlecht und Geschlechter) は、貸し出されることが少ないのに、その割に手あかで汚れている”と、謹厳な顔に苦笑を浮かべて言ったことである。地下には標本室があって、Km 教授の分類の講義の時何回か入った。後に1回だけ、Kw 教授に連れていかれ、引き出しの中に沢山入れられていた鳥の仮はく製をとり出して、1

つ1つ名前を言われたが、シジュウカラ、ホホジロ、アトリ、等々、私にはそれぞれが他のものとのように違うのか、全く区別がつかなかった。このころ、Km 教授の分類学の講義で使う、“パーカー アンド ハッセル”の無せきつい動物学の本を、各自借り出した。この本は毎年使われていて、“バカがハッセル”する本と言われて有名であり、私たちはすでに SI 助手から聞いて知っていた。そのほかには、ショウジョウバエの飼育室などがあつた。

私の体力は当時十分に回復していたわけではなく、とりわけ Ym 講師の生態実習はつらかつた。くら馬川、八瀬川の溪流、高野川、加茂川などでの水生こん虫の採集と水質（温度、pH、酸素溶存量）の測定、大覚寺の大沢の池やびわ湖までも出かけてのプランクトン採集、あるいは瀬田川、桂川の水生动物の採集などで歩きまわらされたが、特に困つたのは東山を横断して山科までのこん虫採集であつた。この時は体力の消耗がひどく、皆の後からあえぎながら行つて行く始末だつた。こんな時、Os 君は後れてくる私をよく待っていてくれた。

このころから、Kw 教授は鳥に興味があるようだつた。講義にも多分にそれが現われていた。そんなことで、ある日、比えい山の宿坊で前夜から泊り込み、教授直接の指導のもとに鳥の鳴き声を聞く会が設けられた。当日、朝から微熱があつて、山へ出かけようか、それとも In 君に連絡して休もうかと迷つていた。しかし、こんな時、少人数のうちで欠席するのも悪いと察し、夕方から行く心算をしていた。夕方近くなると頭がかかかしてきたが、玄関まで出ると倒れてしまった。義叔母が驚いて検温すると、 39.5° 余りもあつて無理に寝かされた。結局、In 君にも連絡できず、無断欠席してしまつたことになる。教授が非常に意気込んでいたのに、病気とはいえ、もともと数少ない中から1人無断欠席では、当然気を悪くされたに違いないと思つた。

遺伝の実習は、年とつた On 講師の担当で、専らショウジョウバエを牛乳ビンの中で飼育し、羽化してきた F_1 、ときには F_2 を選り分けて数を数える仕事だつた。牛乳ビンの底をパンパンと音を立ててたたき、麻醉ビンの中へハエを追い落とす作業ばかりであつた。

叔父の家へきたころは、円山公園の大桜が満開を過ぎようとしていた。壬生寺で狂言が行なわれるころになると春はもう過ぎ、街には雨がしとしと降つたり止んだりして、うつつしい日が続く。そんなある日、朝、洗面に行こうとすると、突然、義叔母があわてて2階からかけ降りてきた。間もなく近くの医者がかけてつてきたが、その時はもう遅く、叔父はすでに亡くなつていたのである。側にいた義叔母が気付かなかつたほどだから、全くの急死であつた。当年49才、おそらく急性心不全だつたのだろう。義叔母には、女学校へ行つてゐる姉、小学生の弟、まだ小さかつた末の妹の、3人の子供が残された。

叔父の急死に、義叔母はもちろん、私も含めて一家が一時ほうぜんとなつた。それから、親類、友人、知人への知らせに始まり、目の回るような忙しさが襲つた。そして、Kw 教授の2度目の探鳥会のある日だつたことを全く忘れていた。気がついた時にはすでにお通夜が始まつていたのであ

る。一同はもう山へ着いているだろう。いくら叔父の急死とはいえ、無断欠席はよくなかった。教授の信用をさらに失なったことは間違いない。

黒谷の奥、花山火葬場への道は、わびしく悲しかった。3人の子供を抱えた義叔母は気の毒に思えた。しばらくして義叔母は、叔父が勤めていた市営バスに勤めることになった。私は止むをえず義叔母の家を出て、北白川の留学生 Os 君の近くへ引越した。

Os 君のアパートも近くにあった。京都でアパートといえばまだ珍しい時代で、ひどくモダンな感じがした。In 君と2人で遊びに行った時、ガスコンロに5錢玉を入れると一定量だけガスが出るのを珍しく思った。

夏休早々、白浜の臨海実験所へ Kw 教授と共に出かけた。早期プランクトン・ネットをひき、スケッチを画く。ある日、教授はシャーレに入った透明な小さい虫を持ってきて質問した。当然知らなかった。他の連中も知らなかった。私は安心した。ヒモムシの幼虫ピリデュームだそうである。知らなくて当り前であった。Kk 君があまり知ったか振りするので他の者は知らず知らずに Kk 君のベースに引きこまれたが、それほど知らねばならぬと思う動物が多かったわけで、これにはまいった。大体、山国育ちの私には海の動物の採集、Ut 講師の指導での解剖、そしてとりわけ、日本海と違って干潮の時に遠くまで砂レキの浅瀬が露出する事が珍しかった。In 君も海のない県の出身で、2人で潮留りの中の大物をねらった。20センチ余りの魚をやっと捕えて持って帰ると、“よく怪我せずに捕えてきたな”と言われ、調べてみたらゴンズイだったりした。教授からは、“もっと無せきつい動物に注意しなさい”と言われた。こんな生活を Os 君は、当時われらの手のとどかない高価なカメラ、ライカでせっせと撮ってくれた。その写真は今でもある。

後期になると、Mn 助教授の組織実習が始った。結局はプレパラート作りが主目的のような実習であった。私が第三講座に所属してからのことだが、同講座の Mn 助教授には忘れ得ぬ思い出がある。Mn 助教授は、後年ミノファーゲンなる薬品をつくり、抗生物質が盛んになるまでの薬として有名になった人である。ある時、助教授は私に化膿菌の培養を手伝わせた。移し換える時、ピペットで菌を口の中まで吸い上げてしまい、その後充分口の中を洗わなかったものだから、ひどく発熱して困ったことがあった。でも、このことは同講座のだれにも言っていない。私は、始めてのことにはどこかで失敗するように出来ているような気がする。

2回生になると、いよいよ Ich 助手の輪読が始った。謹厳な先生に対すると、何となく胸中にそれに反抗するものができてきて、ふざけたことを言いたくなる悪い癖がある。第1回の輪読が当たった。卵割 (cleavage) の項からであった。“卵割、ドイツでは Furchung といいまして”と思わず口から出た。とたんに、“君、何時ドイツへ行って来た。”“私は行きませんが、In 君は行って来ました。”学生がまさか外国へなど行ってないだろうと思っていたのか Ich 助

手は驚いたらしく、ドイツへ行ったときの船か鉄道のことなどを聞いたと思う。おかげで、自分が訳す分量が少なくて時間がきたから助かった。余計なことを言って少しでも助かったのは実はこれだけで、ほかはすべて損か失敗につながっている。

イモリ卵の採集は、伏見の方の水田に水を引く溝で行なった。珍らしくて、たまにがんばって思い切り沢山採集したら、教室の他の人達のことを考えて余計に採らないようにと注意された。実習は、イモリの発生過程をいろいろ異なった薬品で処理して、阻害反応を見ることであった。私には、ジニトロフエノール (DNP) が当たった。その効果は私にはよくわからなかった。もの本によると、ヤセ薬として用いられるとあった。何か代謝阻害でもするのだろうということにはわかった。実習の終りの結果発表もその程度の説明をしたが、どんな結果だったかは記憶にない。In 君の塩化リチウム処理では、裏返し月不のようなものができ、後に Ich 助手と共著で、「植物及び動物」誌 —— 今は廃刊になっている —— に投稿したそうである。

せきつい動物の担当は、新任の Nk 講師だった。前年台湾へメクラヘビを探しに行った帰りに、ちょうど私達の実習で白浜の実験所にいた Km 教授のところへ寄ったとのことである。それでヘビの専門家であることを知った。お陰でその実習は、ヘビの解剖にながながとかがかった。最後はマウスの解剖で、この小さい動物の血管系を見るのに困っていると、これは私品だが、といって、このころまだ珍しい双眼解剖顕微鏡を貸してくれたことを思い出す。In 君は、どちらかという自分より年下かも知れないこの講師に何か難くせをつけたい気があるらしく、講師が大脳(セレブラム)と小脳(セレベラム)とを間違わないようにと注意しておきながら、話の中で自分がちょっと言い違えたことを、いつまでも私に言って面白がっていた。

生理学実習は、ベテラン On 講師だった。博識で、気軽に話しこまれて、親しみ易かった。実習ではいつも、はじめに少し講義してあとはほとんど1回も実習室に姿を現わすことはなかった。何の実験だったか記憶ははっきりしないが、2人で組んだ実験で、たまたま講師が来てデータを見た。“これは変だ”と言ったので、つい気易さから冗談のつもりで、“機械が壊れているのでは”と、例の悪い癖が出た。すると、ジロリと私を見たかと思うと、黙って姿が消えた。壊れるほどの精密な機械を使っていなかったことは確かだし、私の頭の中の機械が壊れているという意味で言ったのだが、理解されなかったらしい。舌足らずな言い方を、自分でくやしいと思った。<最近 On 講師にこの話をしたら、“そういうことは、たんとたんとありすぎて、いちいち覚えてない”ということでした —— 会長>

白浜の臨海実験所で、ウニの発生実習をするということになっていたのだが、これは話だけで結局やらなかった。第3講座(発生)では、イモリの実験に忙しくて、ついていく者がだれもいなかったらしい。後年、大学の先生になってから、ウニの発生の学生実習をやらされることになり、名古屋大学の管島臨海実験所へ習いに行く始末となった。

大学2年足らずの間の実習について、少々書き過ぎたようだ。入学前、“動物学科へ入って狸でも飼うか”と安易に考えていたが、動物学科が狸を飼えるような環境ではなく、夢想もはなはだしいということ、これらの実習をやっていたという程思い知らされたことが、未だに私の気持の中にあるかららしい。しかし、In 君は、よく北門横の進々堂でコーヒーを飲みながら話し合った言葉の中から、まだ第2講座（生理・生態）に入って鉄砲を使うことを忘れないでいるらしかった。彼はどこからその情報を仕入れてきたのか、第2講座には狩猟解禁前でも発砲が許される鑑札があって、また小型の良い鉄砲もあると主張していた。それに、図書館のいわく付きの本（Geschlecht und Geschlechter）も、彼はすでに見てきたらしく、“ダウ”インチのすごい絵が載ってるよ”と告げてくれたのも彼だった。＜それで、先生は見たんですか？ —— 会長＞

その彼も、すでにこの世にいない。しかし、彼とよく話し合った進々堂はまだあるだろう。＜あるある、昔のままで —— 会長＞それより、教室の屋上からよく見えた比えい山、大文字山は、これからも四季に粧を変えながら、いつまでもその姿を見せてくれるだろう。

このあと1年で大学を卒業することになるのだが、その後数年でさびしい思いをしながらここを去らねばならぬ運命は、この時まだわかっていない。もう少し、大学内での生活をつづっていくことにしよう。

これから、多少専門的な事項に触れるつもりである。と、当時の資料を調べ、それによって正しい事実を伝えようとするものではない。あくまでも、その時代の私自身の感覚、行動を出来るだけ思い出して書こうというわけである。当時の私の知識、感覚は、現在の私のそれではない。＜もう50年程昔のことですものね —— 会長＞ これまでもそうして書いてきたのだが、自分をタイムトンネルの中において叙述することは結構難しい。私自身が調べ実行した純専門的なことのうち、主要な点は割合覚えているのだが、少しはずれると、あの時どのように理解していたかを思い出すのに苦労する。たとえば、あとで述べるつもりだが、Kn 氏の生態学に関して、当時私は彼の本当の生態学を理解できず、間違っうけとめていたかも知れない。＜かの徳田御愁氏ですら、当時は理解できていなかったそうです —— 会長＞ 彼の論文は少ないと言われているが、読んだことはない。私の述べたいことは、しかし、彼の研究業績そのものよりも、それ以外の彼の持っているものなのである。

3回生で講座配分となるので、2回生の半ばになると、どの講座に行こうか、そろそろ考える時期になる。第1講座は分類と遺伝、原生動物には多少の興味がないことはなかったが、分類と名がつくと何となく興味がそがれる。遺伝そのものには引かれるものがあったが、毎日牛乳ピンの尻をたたいてハエの数を数えるのはたまらないと思った。Kn 教授の講義は、分類学も遺伝学も、実によく整理されそのまま著書にしてもよいと思われるものだったが、私の結論は上述の如く幼稚な理由で、どうしてもという気にはなれなかった。第2講座は生態で、教室員も多く、一

番発展している講座のようであった。私を開眼してくれた Kn 氏もこの講座にいた。しかし、私は Kn 氏その人の人格、研究態度、方法に心を奪われたのであって、生態学そのものに心酔したわけではない。狸を飼うのならこんな講座がいいのだろうが、今では全くその意志もなくなり、また飼おうと思ってもそんな環境ではなかった。生態学にはやはり分類がついて回るようだし、その上第2講座に入るなら鳥に興味を持たねばならないという戒律があるらしい、といううわさが、われわれの間に流れていた。鳥といえはすぐ、比えい山の探鳥会のことが思い出され、私は Kw 教授に全く信用のないことには自信があった。これはずっと後のことだが、Kw 先生が富山で講演されている最中に倒れられ、富山の病院から都合で金沢の大学病院へ転院された時、私は金沢大学にいた。呼び出されてお見舞に行くと、意識ははっきりしていて話はされたが体は動かず寝たきりで、当時の元気なおもかけはなく、今昔の感に耐えないという心境はこんなことを言うのだろうと、つくづく思ったことがある。先生の講義は、Kn 教授のような教科書的ではなく講演式で、講義の中にストーリーがあり、われわれ新米学生には面白かった。今でも覚えているのは、当時盛んとなり出した共産主義に対応するために作られたらしい講演の一部である。人間以外でもっと完全な共産社会を作っているのはハチヤアリだが、女王以外の大部分の雌は全体のために営々と働く。ところがそれでもなお食糧難で、栄養不良で雌としての機能は失なわれてしまった。その証拠に、女王を失なうと、機能を消失している雌、つまり働きアリに、せっせと餌を与えて女王にする。もっとひどい例では、ある種のアリで、気候が悪くなる前に、雌は食糧をうんと胃の中に貯めこみまるまるとふくらんで巣穴の天井にぶら下る。胃の消化力もなくして1匹1匹の雌アリそのものが食糧の貯蔵袋になって、全体に奉仕するのである。更にひどい共産社会は腔腸動物の中にあり、サンゴ虫は個体がお互いに接着して全体に縛られている。あるものは、その中で分業——生殖、捕食——し、専門職として全体に奉仕しているが、個体としての自由はない。結論は、共産社会がそれほど優れた理想社会ならば、それを完全に実行している社会性のハチヤアリは、もっとすぐれた動物として進化していいはずである、といったものであった。さらに極端な共産社会を営むサンゴ虫は、腔腸動物にしか進化できなかったではないか。このような擬人的説明では満足できないものがあるだろうが、当時の私は結構面白く聞いていた。

第3講座は発生である。Ok 教授の講義は、今から考えると何を聞いたのか定かでない。ただ、講義だけ聞いて勉強しようと思ってもだめだ、と言われたことは覚えている。当時の新語、実験発生学とか実験形態学とかいう言葉は、ルーが始めて卵に操作を加えた実験をやり、発生力学あるいは発生機構学となえたことから出発した、ということも講義で記憶はある。不思議なことにそのほかは余り記憶にない。イモリを使っての実験発生学の概要は、Ich 助手の実験・輪読の合い間に、おぼろげながら知った。3つの講座の中で強いて選ぶとしたらと自問すると、第3講座により興味があった。それで、Ich 助手の話をつよりに、実験発生学の勉強にとりかかった、といえは大きさに聞えるが、私なりのやり方で調べてみたということである。

オルガナイザー理論がシュペーマンの弟子のマンゴルドによって発表されてから約10年、オルガナイザー・ラッシュは始ったばかりといってもよい時代であった。あのころは、主として Roux の Arch を読めば大体の輪郭は解ったつもりになれた。京都ではそのころ、オルガナイザーを編制原と呼び、その編制原に直接アタックする仕事は、編制原物質の解明に向けられていた。本家のドイツではグリコーゲン説につづいて酸刺激説、イギリスではステロール説、アメリカではケファリン説が出され、編制原物質の研究は全く国際的に広がり、行くところを知らずといった状態だった。私は、もちろん、そんな中に割り込むつもりはなかったし、その上物質の探究というのはどうも苦手であった。それはそれとして、第3講座には、Ok 教授の外に Mn 助教授がいたが、この人はどうも発生学とは直接関係が無いことが解った。Ich 助手はすでにおなじみであったが、他に大学院生が何人かいた。しかし、Ich 助手その他から聞いたところでは、編制原物質に直接手をつけている院生はいないようであった。ではどんな仕事の問題にされているのか、院生のだれかに聞いてみれば一番早いわけだが、まだだれにも近づきはなかった。仕方がないので、Ich 助手に遠回しに聞く方法を考えた。第3講座入りを決めただけではないので、あがらさまに聞くのは悪いと思ったからである。

何か話する機会を待っていたら、実習の合い間にシュペーマンの卵をくくる話になった。卵を2つに結んで双卵環をつくるとき、結び方の強弱で双卵環の程度が異なる、といった話である。私はこの機会と思って、編制原物質について質問した。それから、この男多少は知っているな、と思われたのか、いろいろ話しかけてもらえた。こうして私の知り得た情報によると、発生過程の各部域 —— 神経板・眼・鼻・せき索原基・生殖原基 —— の分化を問題にしているようだ。その時、これではせきつい動物（イモリ）で私が何かやるすき間はない、と直感した。それでも、3つの講座に消去法を適用してみると、やはり第3講座しか残らない。

同級生の4人は大体決めているようだった。Os 君は始めから遺伝と決めていたらしく、牛乳ピンの尻をたたくことに抵抗感はないようであった。Kk、In 両君は第2講座、とくに In 君は、できるかできないかわからないが、鳥射ちがまだ念頭にあるようだし、Kk 君は子供のころからこん虫が好きで、鳥のこともよく知っていた。Hh 君は医者になるのが希望で、卒業したら東大医へ進むと態度を鮮明にし、発生でもやって産婦人科へ行こうかと冗談を言っていた。

私だけがまたしても跳ね出して、例外であった。そのうち年が明けて2回生は終わろうとしている。えい、ままよ、と思い —— これは今にして思えば、バクチ打ちの心境であろう —— 第3講座に決めた。しかしテーマは、せきつい動物（イモリ）でないものを希望した。つまり、無せきつい動物なら何でもよいということになる。狸を飼おうと志を立てて動物学教室にきた者が、無せきつい動物志望に変心したのだから、知った人はあきれられるだろう。<いえいえ、先生を知ってる人はあきれません —— 会長>

3月になって、Ok 教授室のドアをノックした。イモリの中へ無せきつい動物が入りこむ

不都合さを充分意識しながら、恐る恐るその旨開陳した。教授は、“ウム、解った”と即座に承知された。あまりに意外で、こちらは即座に回答できなかった。無せきつい動物のどんなことをやりたいのか、と聞かれたが、こちらの頭の中の知識としてはむしろほとんどイモリしかなく、とっさに答は出てこない。といって、何もありません、と言え、何故無せきつい動物を選んだのか、と次に質問が来るに違いない。まさか、バクチ打ちの根性です、とも言えない。それこそ場当りの、イモリでやっているようなことを無せきつい動物でやってみたい、と思わず口から出てしまった。知らぬ者の強さであろう。教授はそれには答えなくて、“君、手は器用な方か”と聞く。“不器用とは思いますが、器用とも思っていません”と、どっちでもないような返事をする、と、“よし、この次までに返事しよう”ということで、その日は引き下った。

数日後、カエルの発生のスライドの写生がまだ残っていたので、顕微鏡をのぞいていると、Ioh 助手が傍に来て、“君のテーマはどうもプラナリアになるらしい”と教えてくれた。さて、プラナリアとは如何なる動物か。最近では高校の教科書にも出ているが、当時はまだ有名でなく、Km 教授の講義で聞いたはずだが、どうも思い出せない。早速分類表を開いてみると、あった！ 偏形動物門・渦虫綱・三岐腸目の中に、たしかにある。ノートの端にはちゃんと、再生実験に使用、と書いてあった。そのうち、発生実習室で実験していた Sg 氏に紹介された。この人は第3講座の古い先輩で、京都のある高等女学校の先生になっていたのだが、再度教室へ帰ってきて、第3講座の部屋が満員だったので一時的に実習室へおりてきていたのである。そして、この人が何とプラナリアをやっていた。実に幸運でタイミングが良かった。と思ったが、本当はこうして私にプラナリアをやらせるおせん立てが出来ていたということかも知れない。それはともかく、彼と Ok 教授との共著2編とチャイルドの論文など2つ3つ紹介された後、4月の初めに再び Ok 教授に呼び出された。この時は、次に書くようなテーマを示されたのだが、今度は余り動揺することはなかった。

プラナリアの頭部またはそれにつく前イン頭部域片を、後イン頭部域へ移植すると、移植片の前後に新組織が形成され、その2つの新組織の先端にそれぞれ新しくイン頭が形成される。移植片が頭部片か前イン頭部域(ケイ部域)片かで、生じてくる新組織の量、それは新生するイン頭と移植片との間の距離で示されるが、は異なってくる。すなわち、前者の方が後者よりも大きくなるはずである。言い換えれば、編制能の差をはっきり量的に示せ、というテーマである。

移植のテクニックは、Sg 氏が側にいたので好都合であった。ところが、移植した手術虫を丸1日動かさないようにするために、冷蔵庫にいれておかなければならない。当時は電気冷蔵庫なんて思いも及ばぬころだから、小さな氷で冷やすものを使う。冷蔵庫は1つしかなく、それを Sg 氏が使っていて、私を入れる余地がない。また、実体双眼顕微鏡も、3階のイモリ族と Ok 氏が使っていて、私の分はなかった。私はそんなことを知らなかったので、教授に早く移植実験をやりたいと申し入母たら、“まあ、そんなに急ぐな、文献でも読んでおれ”というような工合だった。

5月の終りごろに、どう都合がついたのか、私の実験は可能となった。私は何故か、飢えたものが飯にありついたように夢中になって移植に熱中したが、成功虫は思う程なかなか得られなかった。1ヶ月ほどして、教授は久しぶりに、“どうだ”と言って私のところに現われた。実験があまり進展していないことを聞くと、“着、ウンカにある線虫が寄生すると、その数によってウンカの性転換の程度が違うことを知っているか”と尋ねられた。私が正直に、知らない、と返事すると、“どうだ、やってみるか”と来た。この時、最初にテーマをもらいに行ったときのことを思い出した。無器用ではないと宣言したが、ほんとうは無器用なんだろうか。それを見ぬいてテーマ変更を言われたのか、と考えた。しかし、そんな無器用なものにあの小さなウンカの腸内の線虫の数を、どうして数えろというのだろうか。私は全くわからなくなり、移植作業にも実が入らず、ほんやりしている日がつづいた。気分転換に農学部のごん虫教室へ行って、ウンカの標本を借りてきた。割り合い大きな標本箱にギッシリ小さな虫がつまっている。見ただけでいやになった。

ある日の第3講座のセミナーのとき、先輩の Nk 氏が、私の元気のない様子を見て尋ねてくれた。私はありのままを話して、悩んでいることを告げた。彼は一笑に付して、自分も初めはそんなことをよく言われたもんだ、気にすることは無い、とのこと。同室の先輩 Sg 氏に話したら、最初余りに仕事に打ちこんでいたから、その反動で一時スランプに落ち込んだのだらうと思っていたそう。教授もあるいはそれを見越して言ったのではないかと慰めてくれた。

ここで、級友たちのテーマに少し触れてみたい。先ず、Ob 君は講座入りする以前、早くからテーマは決まっていたようで、モシチューム種のショウジョウバエの突然変異をみていた。いずれ遺伝子座でも決めるのであろう。第2講座の2人はいずれも鳥ではなかった。鳥をやらねばならぬという戒律はデマだったのか、Kk 君は希望のこん虫が入れられて、虫エイとこん虫との関係という大きなテーマをもらい、どんな草木の虫えい、あるいはどの種のこん虫の虫エイをやるか、これから決めるそう。一生懸命虫エイ集めに走りまわって、意外に沢山あるとこぼしていた。次に鉄砲射ちの In 君だが、鳥の希望を言ったのかどうかは知らない。彼は文科系の出身であり、岐阜大垣に家族がいることで、家へ帰った時にも観察できるような仕事という条件があった。それで、最初に社会生活と動物という雲をつかむような問題を出され、困ってついに返上したそうである。その他1~2提案されたが結局、淡水産2枚貝（大型）と魚（モロコ）との関係ということで、今年1年間、カラス貝やイケチョウ貝、イシ貝などの分類、分布をみることに落ちついた。Hm 君は第3講座で、Ioh 助手の提案らしかったが、神経冠のどの部域が頭部軟骨に分化するかを調べるために、神経冠の一部をとり神経板の中に置き、神経板が管状になるときにその中にとり込まして培養するという仕事をしていた。神経母液がホルトフレッター液の中でよく死ぬと、彼もなげいていた。しかし Ioh 助手は、この種の移植実験では死ぬ個体はよくあると言ってくれたので、安心してやっているとのことであった。少々殺しても教授からはテーマの変

更は言われなかったそうである。

今から当時を思い返してみると、口溝橋爆破の1発〔注：中国戦争のはじまり〕から、政府は不拡大を声明しているのをよそに、戦禍は拡大する一方であった。これは、軍部の先走りだつたれどもが思っていたのだが、新聞には反戦の記事は載らなかった。

“酒は涙か留息か”という歌が流行したころだと思う。“心のうさ”を何処へも“捨てどころ”がなかったのかも知れない。また、サーカスの歌というのもあった。“旅のつばくろ さびしかないか おれもさびしい”という歌詞は、みんなさびしかったということか。日本軍が進軍を続けているというのに、意気は上らなかつた。それでも、感傷にひたっておれる程、まだ平和であった。教室内ではだれも徴兵されていくものではなく、まさか将来、戦争にだれもかれも引き出され、長期空白をかかえて教室にもどってきたり、戦死者まで出るとは、だれが予測できただろう。この歌は、戦地へおもむくものの悲哀を予言していたと言えよう。

もっと後に知ったのだが、同級の留学生 G₈ 君は、風のたよりによると、国民軍の航空兵となり、南京上空で戦死したとのことである。日本語がよくわからず、行きどころのないうっ憤を私に向けて不満そうであったあのさびしそうな笑顔が、私の心に、何かもっと出来ることがあったのではないか、という自責の念を植えつけた。

講座に入ると、同級の In 君ばかりでなく、講座内の先輩とも、大学北門の隣りにある喫茶店進々堂へよく通った。Ok 教授はそこでは“つけ”がきくので、教授の姿を見ると時々同席してコーヒーのただ飲みにあずかった。

プラナリア、ヒドラなどの下等な、単一の前後軸を持つ動物の形態形成の理論は、当時、チャイルドの生理的こう配説にほとんど統一されていたといっても過言ではなかつた。しかし、Ok 教授は決して生理的こう配とは言わなかつた。その代わりに、編成能（オルガニゼーション・ポテンシー）と言っていた。これに対して、私の天の邪鬼的精神は、大いに共感を覚えた。

現在でもなお、編成原（形成体）物質の性質は解っていないし、生理的こう配の本質については、更に何処かへ行ってしまっている。最近の再生に関する位置効果論は、果してこれに代わるものかどうか知らない。細胞培養、細胞融合、DNA、分子遺伝学を知らなかつた時代では、これでも論議の先端を行くものであった。

夏が終り初秋になるころ、私の仕事は順調に進んだ。ただ、プラナリアの採集には困った。八瀬、比えい山の溪流からだけでは不足で、しかも無性型を選ぶので、どうしても木曾福島にある大学の生物研究所横の溪流まで、足をのばさなければならなかつた。名古屋から中央線で木曾川に沿って上る時、前に触れた Kn 氏の努力が思い出された。ここで、少ない出会いだったが大きな感銘を与えられた、彼の事を述べてみたい。

彼は、農学部農林生物学科出身で、ここには有名な遺伝学の Kn 教授もいた。私がウンカの線虫のことで落ち込んでいた時、ウンカの標本でも先ず見てやろうと思ったが、理学部の標本室にはなかった。そこで級友の In 君に相談したところ、ちょうど農学部でこん虫を専攻していた大学院生がこちらの第2講座にいるから相談してみたら、と言う。それが Kn 氏であって、彼の紹介で標本を借りることができたのである。こんなことが縁になって彼のところへしばしば邪魔をしに行ったが、彼は実に気持よく相手になって、いろいろのことを教えてくれた。のちに、私が生気を取りもどして移植実験にはげんだ時も、気分転換によく彼の部屋を訪れた。部屋は、いわゆる第2講座の大広間で、彼の席は窓側の右すみの一角にあり、大きな机をおいて腰かけていた。時々いないこともあった。彼は一時、福井県立武生中学（旧制）の先生をしていたと聞き、私の故郷に近い土地なのでより親しみを感じた。誇張するようなところがなく淡々と話している中に、研究への情熱の強さが感じとれ、また、1つの現象を見るために、我々にはそんな事までも、と思うような広汎な事象を取りあげて調べる、その研究態度は全く徹底したものであった。彼の話の詳細は大部分忘れてしまったけれど、少し思い出して書いてみよう。先ずフユの研究である。この虫は幼時溪流にすむ。溪流といってもいろいろあるから、先ず溪流の状態の調査、さらにその溪流を知るためにそれをつくっている兩岸の地形の調査まで行なうという。この態度には驚いた。彼は元來絵が上手で沢山のスケッチを画き、その上もっと写実的にするためか何百枚もの写真をとっていて、私に見せてくれた。断がい、段丘、あるいは河の上流、中流、下流の遠景の絵、写真を、今でも思い出す。溪流については実に詳細な区分をしていた。先ず、瀬と淵に分け、瀬ではまた底の石の大きさ、形、水の流れなど、淵は川の流れが湾曲したところに来、さらに川岸との関係まで調べ上げていて、私には全く脱帽しかなかった。調べていたこん虫は、主としてフユの幼虫で、ほかに2~3の水生こん虫の分類であったと思う。生態の学生実習では先ず水の温度、PH、 O_2 溶存度などを計らされるが、彼がこの種のを測定したという話は聞かなかった。私が今でも覚えているのは、幼時の水生こん虫は捕食とそれに関連した行動が生活の全部であって、それに応じた形態、環境がある。極端に言えば、虫は1つの捕食機械となっており、食性、環境、形態が全く一体化しているという考えだと思った。従って、同属内の種は環境によって区別される。彼の考えはここから、溪流の区画に向って彼をかり立て、研究に昼も夜もなかったのではなからうか。私の要約には言い過ぎもあるかも知れないが、私は彼の一途なところ、演釈と帰納、帰納と演釈の理論的なところ、更に1つの現象を追うのに非常に広いところから攻めこんでいく方法に、私は心から学ばせられたし、尊敬もした。研究というものを、彼によって開眼させられたと言ってもよい。彼の話は、相手を自分の考えに引き入れようとか、誇示しようとかいう感じのものでなく、素人の私にさえ理解できるように話し、そして自然に溪流に引き入れられる気持だった。始めて会った時から、彼の謙虚さには非常に好感を覚えた。その後私の卒業が近づいて自分の卒論を書くのに忙しくなったり、彼の方も留守がちになったりして、

彼を訪ねなくなった。そのころ、たしか Tk 氏の発案で、「種の起原」を読みなおそうという会—— 会名はあったかなかったか、記憶にない —— が動物学教室に生まれ、たまたま私が出席した時、彼が話題提供者になって話した。その内容は忘れたが、彼の環境と形態との関係についての考えを聞いていた私には、彼が進化論の研究者であることは当然だと思った。

私が大学院を去った後、彼が軍隊に召集されたことを知った。太平洋戦争中、彼がマリアナ島で戦死したことは、敗戦後だいぶんたってから聞いた。しばらく天を仰いで、全く言葉も出なかった。彼は生涯を謙虚に生きた。その戦死も、決して華々しいものではなく、謙虚に死んでいったと、私は確信している。

教室の前通りの並木に木枯しの吹くころ、論文のデータはほとんどそろった。この期間に、講座のセミナーで1回、教授のところで2~3回、報告したが、特にコメントらしいものはなかった。データは、頭部とそれにつづく前イン頭部（ケイ部）域で、たしかに量的に表わされる差を示した。この差を、チャイルドの生理的こう配の差ということにするか、何か別の表現にするかが問題だった。前述のように、こう配説は気に入らなかった。セミナーの発表や教授への中継報告では、頭部域および後頭部域による“誘導能の差”ということで一応すませたが、どうもイモリに屈服したようで内心おだやかでなかった。結局、移植片より常に尾方向の組織（イン頭部も含めて）が形成されるので、苦しまぎれに“尾化能”とつけた。後年、教授と共著で出た時には、Caudalization effect とうまく名づけられていた。

私は、Ok 教授から卒論のテーマをもらった以外に、ほとんど毎日3時ごろにはじまる砂糖なしのストレート紅茶を飲みながらの雑談から、多くのものを得た。たいいてい教授が話し手で、他は聞き手であった。教授は、英独仏と7年間も渡り歩いてきており、その裏話をよく聞かされた。博識が関西弁でしゃべられ、また英仏語の違者なこともよくわかった。大学院の某氏は、“教授とわれわれとの差は、語学の差ではないかな”と言ったのが印象的であった。ここで得た大きなもの、今でも心にありながら満足にできなかったことは、“思いつき”を大切にすることであった。研究の発展はそれが出発点となり、それからの進行は論理に従っていけばよい。その思いつきは、突然のこともあるし、でなければ、考えに考えぬくことだ。今では当然のことと思っているが、数多い雑談の中から体内にしみ込んだものは、単なる概念とは違っている。教授から命令、強制を受けたことはなかった。大変らい落で大らかな性格の教授だと思っていたが、先輩からはそうでもない、厳しいところのある事も聞いた。後年それを、私はいやという程痛感することになる。いずれ述べることにしよう。

卒業式の日には来たが卒業したという実感はなく、式には出なかった。今の生活に別れを告げる気にはなれなかった。Os 君は当然大学院へ進み、Kk 君は立命館大学へ就職し、In 君は大学院生という身分がいやになって、もっと自由な身分で第2講座に残ることを望み、それが通って

無給副手になった。Hm 君は無事東大医学部に合格した。私は、今の生活は捨て難く続けていきたかったが、Kn 氏のことを考えると、果して研究者としての資格があるのかどうか、疑問に思えてきた。また、“思いつき”の人になれるとは自信の持ちようすらなかった。こうしてまた、私だけが例外の人になりかけていたのである。

百万遍の裏にある Hm 君の下宿へ行くと、ちょうど転居するための荷作りをしていた。その張り切った元気な顔を見ると、急にさびしく空虚な気持ちになり、何となく彼がうらやましくなった。Hm 君の下宿を出ると、足はいつもの進々堂へ向いた。一人でコーヒーを飲んでいると、先輩の Tk 氏が入ってきた。プラナリアの話になると彼は、結論として、いまプラナリアを使って何ができるだろうか、と懐疑的な意見を述べた。彼の好意はよく理解できたのだが、プラナリアでは大したことは出来まいと言われると、逆に、私の気持は大学院へ入ってとにかくプラナリアをやる方向に向いてしまった。Tk 氏はすでに亡くなられたが、私は彼に反感を持ったわけではない。今でも尊敬している1人である。彼といろいろ話しているうちに、下等無せきつい動物に共通な月不の体制に興味を持つようになった。チャイルドの生理的こう配よりも、もっと具体的な概念はないものか、などと考えるようになった。彼からいろいろ、発生の機構を説明してもらっているうちに、そんなことを考えたのだが、余りに大それたことであるのに気がついて、彼の好意にお礼を言って別れた。この後私の大学院入りが決まり、プラナリアの採集を続行することになった。

大学院の入学式はあったのかなかったのか、いずれにしても出席した記憶はない。無給副手になった In 君は、太垣から出てくる回数が次第に減ってきた。いつも教室にいる Os 君とは、しばしば構内にある理学部植物園で雑談した。彼の大学院の授業料は免除になった。それで私も一応教授に話してみると、国家に有用な研究に対して免除されるとのことである。プラナリアでは鉄砲弾を撃つこともよけることもできるわけではない、とあきらめた。ところが何日かたって免除の通知がきたのである。どんな理由で免除になったのか、お礼に行ったとき、言われもしなかったし聞きもしなかった。Sg 氏はこの時大阪府立大手前高女に就職した。また、Ok 教授の、“カオリン（無機物質）による第2次神経組織の誘導”なる論文が出たのもこのころである。これで、誘導物質は特定の単一物質では表わせないようになってしまった。

このころ、東大から Ym 氏がきて、第3講座のわれわれの部屋で実験するようになった。東京にはイモリが少なかったためらしい。後に、“形態形成のポテンシャル論”として、形態形成を量的に説明しようとするチャイルドと似た概念を、イモリ月不について彼は提出したが、このときの実験がもとになっている。このあと、やはり東大から Hm 氏もきて、あのころは東大グループと京大の第3講座グループの交流が盛んであった。後年、この両氏は名大へ行き、Ym 氏はさらにアメリカへ渡って、現在でも在外生活である。Hm 氏も停年になった。そのころの人々は、広島大、東京教育大などへ出ていったが、すべてすでに停年をむかえている。これらの人達はい

わばイモリ族であり、私との関係は遠いといってよい。

しかし、ここで東大の両氏やこちら（京都）の人達、とくに前記の Tk 氏のおかげで接することができ、私に説明し難い影響を与えた、東京教育大学の OkH 教授に登場していただくことにする。といって私は、教授と1対1で話をしたことはなく単に2〜3度、Tk 氏その他2、3の人達と同席で話を聞いただけなのだから、こんなことを言うと、地下であの口元を少しゆがめたニヒルの思われる表情で、苦笑されるに違いない。

教授は、イモリ胚の脚の分化について、Tk 氏と同じ方向の研究をされていたから、私にすればいわゆるイモリ族であった。ところが、話を聞いているうちに、スケールの違ったイモリ族であることがわかってきた。博識で語学に減法強いことはわが Ok 教授と同様だが、OkH 教授から直接感じとれたことは、そのカプトガニの研究からもわかるように、発生機構を系統発生的にとらえようとする思考であった。

ここで少し話題をかえよう。大学院生は、初年度には出稼ぎ（アルバイト）はできななかったが、次年度になると少しはできるようになる。智恩院の境内に、普通の中等学校より2年おくれで入学する専門学校の種類である、足さんの養成学校があった。ここで私は生物と化学の講義をすることになった。生徒はすべて寮に入り、厳しい仏教の戒律を守らされ、肉食は禁止で、その上生物の講義は植物だけに制限されるという、徹底したものであった。この学校の中へ俗風を吹き込むのが、物理・数学の先生と私の2人である。植物だけというから、植物の観察という名の下に、生徒を智恩院の裏山沿いに東山の先まで連れ出したりした。お昼には大学へ帰らねばならぬので、授業はいつも第1限目からだったが、少し早く行くと朝の勤業をやっている。それが終ると仏菓が出た。当時、そろそろ物資、特に砂糖が不足しはじめたころなので、甘いものの好きな私には、これこそ“仏の慈悲”であった。

ある秋日和りの、気持の良い朝であった。今日は植物観察ということで、また生徒を校外に連れ出した。生徒達は、たまには西の方へ行きたい、という。ついその気になって、ヨシとばかり智恩院の表通り、つまり市電の東山線へ出た。そして、金閣寺へ行こうというので、東山通りを八坂神社前の停留所の方へ歩き始めた。ふと気がつくと、通行人の眼がみんなこちらへ向けられている。墨染の法衣を着て、頭にはちようどトルコ人がかぶるような帽子というか頭布というか、皆それをかむった尼僧が10数人、行列をつくって歩く風景は、いくらお寺に慣れている京都でも、異様に見えたらしい。その尼僧の行列の前を背広姿の若い男が歩いて行くのは、もっと奇妙に見えるに違いない、と思ったとたん、私の歩調は早くなった。生徒達は驚いて、私の跡を小走りで離れないように追いかけてきた。それから、どうして電車に乗ったか、果して金閣寺まで行ったのか、帰りはどうしたのか、今にして全然記憶がない。無我夢中というのはいくつかの事なのだろう。

この学校の正しい名前は、尼衆学校という。尼寺のあん主となるにはこの学校を卒業する必要があるので、ずいぶん年とった人も入学してくる。結婚できないから、後継者は常に養女である。いつだったか、新入生の中に私の故郷の尼寺の養女がいて、少し話しているうちに私の身元がばれてしまった。こうして私のことが郷里の町に知れわたり、医者の子が京都で尼さんの先生をしているそうナ、その次の代には棺桶屋をしたらよい、とうわさされたそうである。

プラナリアの追加実験はほとんど終り、それをまとめながら次は何処へ向かうか、教授と相談しようと思っていた矢先、OK教授の東大転出の話が出た。今年1年は兼任で来年から専任になる、とのことであった。これを聞かせてくれたのはTK助手である。助手は別として、講座に残っている人のうち、NK氏は学位論文もほとんどできていたのでゆう然としていた。AS氏はすでに京都市内の女学校へ出ることが決まっていたし、MK氏は新潟医大（現新潟大学医学部）の解剖学教室へ出てしまっていた。KW氏と私だけが中途半端であった。2人で動・植物学教室の屋上に上り、暗然として大文字山を見ながら、前途を語り合った。

教授から直接聞いたわけではないが、東京へは助手1人と大学院生1人を連れて行ってもよいと、教授は考えているようだ。KW氏は、断然京都に残って論文を書く、と決心した。私には論文の目安などなかった。TK助手は、若し東京行の話があっても断わるつもりだった。東京行の大学院生1人が若し私だったとしても、これまで東大の人達と話した経験がないわけではなかったのだから、私の行く処ではなさそうだったと思った。

まあ、来年は何とかなるだろう。でも、結局また例外におかれて出発せねばならないのだろうか。

大文字山を背にして、遠く西山に陽の落ちるのをながめながら、こんなに孤独を味ったのは始めてであった。

(つづく)

< 書 評 >

「津軽共和国憲法」

設楽 順 著

あすなろ舎

1985年

420円

この本に出てくるたとえ話を一つ、日本語に訳して紹介しましょう。

「たとえばここにあるこの薬、“高血圧を治すにはこれがいいでしょう”と言う医者と、“その薬は危険だ”という医者がいたら、だれもそんな薬は飲まないでしょう。もう一つ例えて言うと、ガンにかかって、もうすぐ死んでしまうと思っている人だったら、“この薬はガンに利く”と言う医者と、“さっぱり利かないところか死期を早めるよ”と言う医者がいたとしたら、そのガン患者は運を天にまかせてその薬を飲むかも知れません。」

本州の北の端に、末期症状のガン患者がいる。名前は「むつ小川原開発株式会社」、ガンは、どんどん増える借金、1300億。死ねば、出資した青森県や銀行の金はコゲつき、中枢の首が飛ぶのは間違いない。一度手に入れた権力は、命にかけても離さないという例は、大小取り混ぜて至る所にありますからおそらく、この文を読んでいるあなたの身近にもあるでしょう。<日本生物学会の会長など、どうかね——会長> 大学の教授がその権力をふりまわすだけで、金茶話大学のどこだかが無茶苦茶になっているくらいだから、はるかに強大な権力を持った北村知事が振り回したらどうなるか、それはエライ事です。県議会だって、権力を持って甘い汁を吸っている、同じ穴のムジナの集団、最早だれも阻止できません。その結果、「核燃料（核のゴミ）サイクル基地」という、他のだれも飲まないといんでもない薬を飲む事が決まったのです。原子力船「むつ」も、近くで臨終の床についているというのに。

六ヶ所村は、農業と牧畜と漁業から成り立つ、少なくとも旅行者の目にはのどかな所です。しかし「核のゴミサイクル基地」は、平常運転時でさえ、原発320個分の放射性物質をまき散らす。そしてこの牧歌的な風景に、放射性物質が降り積り、やがて村の人にガンや遺伝病が増える。そうなれば、そこで穫れた穀物や牛乳や魚なんて、だれも食べないに決まっている。その上、起きないハズなのに起きるのが事故。それによる被害はあまりにも重大だ。しかし東京までは放射能も届かないから、どおってことないか。あー、ウダテ、ウダテ。

こんな結果をもたらす、巨大な化物「核のゴミサイクル基地」にかみ付こうとしている人達がいる。その人達は「津軽共和国」を建設し、「津軽共和国憲法」を公布した。この国の国民は、小玉で酸っぱい紅玉を好み、津軽塗りと津軽の風土を愛するジョッパーリ達である。だから彼らは、だれが何と言おうと、「ウダテものはウダテ」と言う。

この憲法は当然ながら、津軽語で書かれている。筆者は、日本国民でありながら外国語の津軽語を理解できる希少な人間であるから良いが、一般の日本人は「津軽語小辞典」を利用するのが良いだろう。小学校から大学まで勉強しても身に付かない英語に比べれば、はるかに易しい外

国語である事は保障する。

核燃はウダデくてマネだ。

[カラボネヤミ]

<< 生物学誇大事典 >>

めいよきょうじゅ (名誉教授)

大学において、特別に功績のあった教授、もしくは、何の功績もなくとも長年の間教授の地位を保ち続けた教授が、退官後その大学から授けられる称号。その功績とは、ノーベル賞をもらったとか、機動隊を導入して学生を弾圧したとか、大学の名声を高めた行為を指す。もっとも、こういう人は少なく、たいていの名誉教授は、単に長らく教授職にあっただけの人である。ただし、わずかでも“良心”があれば、悩むことなく教授で在り続けることは難しく、たしかに称賛に値する行為である。一方、助教授もしくは助手のまま停年に至ることも、少々違った意味ではあるが非常に困難な事業であり、名誉助教授、名誉助手の称号にふさわしいと考えられるが、現在のところそういう制度はつくられていない。文部省の怠慢であろう。 → 不名誉教授

<< 生物学誇大事典 >>

ふめいよきょうじゅ (不名誉教授)

在職中、教授にあるまじき行為を行なった教授に、退官後与えられる称号。その行為とは、たとえば、自分の息子が受験することを忘れて入試委員長をひきうけたり — かわいそうに息子の受験は認められず、1年浪人した — 、ある試験で、1~5番を優、6~10番を良、11~15番を優、16~20番を良とつけ、次の試験では優と良とを逆につけて、採点の“絶対的公平化”をはかったり、そういう行為をいう。教授でありながら学生にちょっと追及されるとたちまち自己批判文書を書いたり、それが不十分だとして学生から突っ返されると、「試験のとき、君たちにも“書き賃”をやったではないか。ワシにも“書き賃”くれよ」などと、教授の誇りを全く捨て去ったようなことを言ったりするのも、充分不名誉教授の資格がある。ただし、これを制度化している大学はなく、金沢大学理学部に1例存在するのみである。

◎◎◎ 編集者への手紙 ◎◎◎

(その1) 遅ればせながら新年のお慶び申し上げます。本年も会費を入金致しましたので、宣しく申し上げます。

さて、遅ればせついでに、もう一つ申し上げておかねばなりません。昨秋(9月ごろであったと思います)、ものかけから使いふるしの真魚板が一枚出て来まして、上司の×××とも相談した上で、「日本生物学会中国支部」の看板を出すことにしました。

大きさも丁度よいし、なにより真魚板ならば会長とも無縁ではないから<今はカエルやってくるから無縁や——会長>、とぶら下げてみたところ、クギが抜けて一度は地面へ墜落しましたものの、その後下げ直してからは、サル共が軒へ上がる際の足場に使っても落ちることなく、寒風にゆらゆらとゆすられながらもぶら下がり続けております。そのような次第で、日本生物学会中国支部が芽出度く、ここ広島の地に誕生した旨、報告しておきます。現在のところ、支部長×××、支部事務局長〇〇の2名で支部の運営を行っており、支部会則等は今後考えることにしておりますので、いずれまた出来ました折り報告させていただきます。

看板を出してからの反響は、「すごいなあ」という声が多く、たしかに日本生物学会の支部の看板などはそう何処にでもあるというのではなく、ある意味では「すごい」のかもしれませんが、若干の誤解が存在するようでもあります。先日などは、「あれ、日本生物学会……あったかなそんなの……」と悩む御任もあり、「いや、……あったな、あったあった。こないだ東京で大会があった奴、あれだったな」などと、自らに言いきかせておられる姿は、なかなか見ものでありました。

先ずは御報告まで。

敬白。

1985・1・7

日本生物学会長 奥野良之助様

日本生物学会 中国支部 事務局長 〇〇

前 略 日本生物学会の今年度会費をまだ払っておりませんのでお送りします。

.....

話はかわりますが、先日、中国人(たぶん広島市と友好都市の縁組をした四川省の面々だと思いますが)の団が宮島へやってきた折りに、「日本生物学会中国支部」の看板を指して、案内してきた役人に、何故中国支部がここにあるのかと詰問していました。役人いわく、「この中国はあなたの国の中国とは違うのだ」とわかったようなわからないような説明をしたあと、「中国とはこの地方のことだ」とつけ加えていました。ひょっとしたら国際問題に発展するかもしれないと、ひそかに期待しているのですが<変なこと期待するな——会長>。しかし、せいぜい会社から「まぎらわしいきたない看板をはずせ」といつてくるのがおちでしょう。

日本生物学会 中国支部 支部長 ×××

(その2) なんにも理由はないけれど、「日本生物学会」なるものへの勧誘は断わろうと思ふ。動物学会や植物学会よりは面白そうだが、誘われるままにすぐ入会してしまうのは、なんとなくシヤクではないか。しいて言えば、それが謝絶の動機である。

会誌をバラバラとめくってみる。各々の論文が何の一貫性もないままに並んでいて、それでいて後から考えると一定の傾向があったりして。そして、それに気づいてニヤリとする。——
ブキミだ。一種の快感が走る。会誌を貸して頂いてから今日まで相当に忙しく(昨日まで白山にいた。私は標高1000 m 以上も大好き)、まだほとんど読んでないから、以上の様な感想くらいしか書けない。「非会員が会誌を長く持っているのとタタリがあるから、早く返すか、早く会員になれ」という一方的洞喝(オコトバ)により、会誌はとりあえず返す。しかし、もう一度じっくり読みたいので、あらためて貸して頂ければ幸いである。

<彼はしきりに、あたかも私が入会を薦めたかの如く書いているが、入っただけで前途の望みが全くなくなるこんな恐い会に、会長たる私が入会を勧誘するわけではないではないか。当会会員はすべて、私の切なる入会阻止勧告をしりぞけて無理に侵入した者である —— 会長>

(その3) とんでもない学会に入ってしまったと後悔しています。学会誌が届いたちようどその日、財布の中をのぞいてみますと、100円玉が1枚と10円玉1円玉が3~4枚づつまみしそうに入っておりまして、この上100円玉が消えてしまったら10円、1円たちがどんなに悲しむだろう(それ以上に私の生活はどうなるだろう)かと思ひ、ここはかわいい10円、1円のため会費をふみたおし、こんな学会からすぐさま脱退しようと決心しておりましたが、幸か不幸か2日前、バイト代3万5千円が入りまして、10円、1円一同喜んでおりましたが、累積する債務がドンと立ちふさがり、聖徳太子お1人<古いね>は昨日すでにお亡くなりになられ、お2人目も危ないという現在、どうするべきか迷っておりましたが、「洋々たる前途」(それにしては、4回生だというのに単位がほとんどないが)まで投げ打って学会を続けて行こうとこの度決心し、会員としての初めての義務を果すべく、200円、耳をそろえて払いたいと思ひます。よろしく。<たった200円のことゴタクを並べるな。でも脱退しなかったのはよき選択であった。大きな声では言えんが、当会には秘密規定がいくつかあって、その1つに、退会費10万円、というのがある。一生かかっても払えんやろ —— 会長>

(その4) 日本生物学会誌、1号から20号までうけとりました。学校で小包をといて、ニタニタとながめていたら、めずらしがって2、3人の人たちが集まってきた。設立趣意書を見て、事務のお姉さまと、定職なきものだと自称する某教員が、会員になりたいというのでよろしく。といっても、2人は会費を送るかどうか? <一向に送ってこないよ —— 会長>

◎ 以上、いずれも無断転載。今後も続けたいと思ひますので、本部あてお手紙下さい。

?? 編集局 へ の 手 紙 ??

お元気ですか。私が卒業して金沢を離れてから、早いものでもうすぐ3年になります。なつかしい生態第1研究室に集う人達にお交りはありませんか。<変わった変った。どうしようもない変り方や——会長> うわさによると、近ごろはけっこう学生たちが出入りしてにぎやかになっているそうですね。私のいたころは、あの部屋に入るのにずいぶん勇気を要したものです。おかげで勞せずして編集局長におさまりましたが、編集部員が1人もいなくて苦勞しました。<何にもしてなかったやないか> 今では第2編集局長や補佐まであるそうですが、それでもポストが足りないのではないですか。<現在、第3編集局を計画中>

あの部屋で毎日のようにコーヒーをよばれながら、会長はじめ多くの一風変わった先生や卒業生の方たちと出合えたのはとても幸運でした。その時受けた影響は、今、教育公務員である私にとって、決定的(致命的?)なものだったような気がします。なかでも、会長から、生物学科内の対立や矛盾を実例にして解釈してもらった、毛沢東「実践論・矛盾論」セミは、とても役に立っています。学校内の対立や矛盾が実によくわかるからです。しかし、あのころからの日和見主義は今だにぬけきらず、なかなか認識が実践へと発展しません。(一方、2人の同僚は反対に冒險主義に走り、1人は学校をやめ、1人は1年で他校へとばされました。)あのとき、Fさんの実践論演習を受けておけばよかったと悔んでいます。

Fさんといえば、あのさり気なく皮肉のこもった言い方でいつもやりこめられていたのを思い出します。正直に言って、とても恐い存在でした。<会長はやさしい存在だったけどね。>その恐い人と一度だけ論争になったことがありました。マルクスの「存在が意識を決定する」に対して、私が意識が存在を決めるのではないかと言ったためです。この問題はあれ以来ずっと心の中に尾をひいているらしく、ヒマな会議の最中に、この人間は私の説にあてはまるとか思ったりしながらニヤニヤしています。今のところ校長をはじめ、私の説に不利な例が圧倒的ですが。しかし、私は持前の観念的傾向をますます強めていますので、そのようないやしい現実には少しもひるみません。存在に対する意識の優位性を信じています。

ところで、大学の移転が決まっているそうですが、そうになると生物学会本部はどうなるのでしょうか。あの水冷式クーラーや、会長がどこかからもらってきて自ら運んだというソファ(途中、路上でそれにすわって休んだという)や、学会誌の原稿を打つタイプなどの落ちつく先はあるのでしょうか。まだ先の話かも知れませんが、とても心配です。<その時になれば、また何とかなるでしょう> 今思えば、あそこは1つの解放区だったような気がします。そのような場がなくなった時、大学には本当に何一つ残るものがなくなってしまうような。<まだFさんが残ってるよ>

それではまた。

元 編 集 局 長

〔〔 編 集 局 S だ よ り 〕〕

<第1編集局より>

(会長と第1編集局長の会話)

1 局長：ずいぶんごぶさたしていますが、皆さん元気ですか。会誌がいつまでたっても出ないのでどうしたのかと思って。

会 長：君がそんなひと事みたいなこと、言ってもらっては困る。会誌の編集は君の責任やないか。

1 局長：そんなこといったって、僕は不在局長だし、そのために第2編集局をつくったんでしょ。2局長にやらせたらいいですよ。

会 長：その2局長がなあ、このところ勝手な動きを始めて、学会の秩序が乱れてきたんや。

1 局長：会長でも秩序が乱れたら困るんですか。

会 長：オレはもともと秩序派や。知らなんだんか。

1 局長：寡分にして知りませんでしたね。それで、2局長が何をやったんですか。

局 長：会長に無断で何人も編集局員を任命しとる。

1 局長：それくらいええんやないですか。編集局が充実して。

会 長：君までそんなこと言うたらいかん。当会は会長独裁制やから、人事権はすべて会長にあるんや。局長といえども勝手に任命することは許さん。

1 局長：支部長だったら「自称すれば直ちに発効する」んですから、任命されなくてもいいんですね。おまけに「支部の管理運営は支部長の独裁とし、本部は一切関知しない」。

局 長：それはそうや。会則にあるもんな。

1 局長：そんなら、第2編集局を編集局支部にしたらどうですか。独裁制にもふれず、2局長も勝手なことができますよ。

会 長：あまり変な知恵をつけるな、余計に混乱するではないか。君も社会に出たら、手練手管を覚えてきたな。

1 局長：在学中の教育が良かったものですから。でも、2局長は沢山局員を任命して、何をやらかそうというのですかね。

局 長：よくはわからんが、会長室を占拠して、コーヒーを自由に飲もうというのではないか。

1 局長：そんなことなら、昔からそうやったやないですか。

局 長：それもそうやな。ああ、そうや。局員に1人づつ編集後記を書かせて、会誌の品格を落とそうという陰謀がある。すでに下品な後記がいくつか来てる。

1 局長：我が学会誌が上品だったとば気が付きませんでした、上品ってどういうことですか。

会 長：上品いうたらなあ、思想性があるということや。

1 局長：今度は思想性の意味がわからなくなった。……これ以上聞いたら怒るやろうしなあ……

会 長：何かいうたか。

1 局長：いや、別に。ところで、編集後記いうたら“投稿”ですかねえ。投稿だったら「無審査・無修正」で載せんならんですよ。

会 長：ええとこに気がついたな。そうや、投稿と見なさなければ審査してもええんや。

1 局長：編集後記だけレフエリーするんですか。けったいな学会誌やなあ。

会 長：審査は面倒やから、勝手に修正することにしよう。

1 局長：そんな無茶な。

会 長：上品に修正するんやからええやないか。

1 局長：勝手に思想性を持たすんですか。

会 長：そういうことになるな。そうなると、ちょっと困ったね。他人の思想性をつくってやるわけにもいかんしなあ。そうか、もっと下品に書き換えたらええわけや。

<第2編集局員に告ぐ。用心せんと、会長に魂までとり換えられるぞ！—— 第1編集局長>

<第2編集局だより>

(パート 1) 文責：第2編集局長

第2編集局が3人になりました。局長と、補佐1、補佐2にするかとか、補佐の1人を会長補佐にしてはどうかとか、いろいろ意見は出たのですが、会長補佐案は残念ながら会長に拒否されてしまいました。(会長暗殺計画失敗!?) 結局、局長の独断で、補佐はだれか女性が編集局へ入ってくるまで空けておくことにしました。<その補佐とは、会長補佐か2局長補佐か、どっちや? 返事のしようによっては、富家さんに言いつけるぞ。2局長の思想性はうちの教授と一諾や言うて —— 会長>

(パート 2) 文責：某平局員

今日、昼ごろ久しぶりに大学へ来て院生室に顔を出した所、かの第2編集局長が、「オイ、オヌシ、原稿できたか?」などといきなり言う。なるほど、確かに私は、第2編集局に名を運んでいた。というような記憶もある。しかし、自慢ではないが、編集活動なんでものに手を染めたことは、一度たりともない。少々焦って聞きただしてみると、編集後記を原稿用紙1枚分、あるいはそれ以下でもよいから書けとの事であった。まあその程度なら、すぐにも書ける。現に、すでに200字ほどは書いてしまったではないか。

それにしても、前もって正式に言い渡してくれておけばいいものを。急に言われたって、何しろ私は忙しい。大学院入試の前は勉強に明け暮れ、今はバイトに明け暮れる日々である。<何のためにバイトしてるか知ってますか? 新しいバイクを買うためですよ —— 2局長> (この行動の急変に対し、だましたの何のと、あちこちから非難の声も上っている様だが)

ともあれ、もうしばらく、おそらく来春ごろになれば、少し私の生活も落ち着く予定である。
＜来春から修士の研究が始まるんやで。忘れてるとちゃうか —— 2局長。ほんとや、忘れてた —— 本人＞ そのころには、時間と労力をかけて、何かやらせていただくことにしよう。

(2 II)

＜要約すると、次はがんばるから、次号に期待してくれ、ということかな —— 2局長。そんなもん、期待できるか —— 会長。ウン、会長の言う方が当たってる —— 本人＞

(パート 3) 文責：補佐 (B)

ある日、日本生物学会第2編集局長に、今度の日本生物学会誌に編集後記をかいてくれとたのまれた。そこで引き受けてしまったのだが、そもそも編集ということをしていないので、当然今度の会誌の内容を知らない。まあ、この編集後記ができないと次号が印刷できないとのことなので、がんばって書いてみることにする。＜どうもありがとう —— 会長＞

そもそも私が編集にかかわっているらしいということになったのは、この日本生物学会に入会するとき、第2編集局長に対して、「おれ、局長補佐をやろうかな」と口をすべらせたのが原因である。本人はそんなことすっかり忘れていたのだが、2局長に「おい、今度の編集後記を書いてくれ。1ページでいいから」と言われて、はたと、おれはそういえば局長補佐であったと思いついた。

私は、こういった多くの人に読まれる雑誌 (何人読むのかな) に書いたことはない。したがって、私は今非常に困惑している。しかし、今になって日本生物学会第2編集局長に辞退を申し込んだら、後がこわい。まあ今度の号には、いい編集後記は書けそうにない。急のことだし、脅迫されて書くのだから。そのかわり、これから冬になり、野外に出ることもなくなり、暇ができる上に、ペナントレースも終ってトラキチの会長からいじめられることもないだろうから、＜まだ桑田問題が残ってるぞ、このいじけ巨人ファンめ —— 会長＞ 日本生物学会第2編集局の方の仕事は少しはやろうと思っている。そうすれば、編集後記らしい編集後記が書けるようになるだろう。

では皆様、次号を期待していて下さい。

＜編集後記らしい編集後記を書くためには、集まった原稿を読まねばならぬ。それには、原稿をタイプするのが一番よい。次号を期待しよう —— 会長。 そんなの、ないですよ —— 本人＞

(パート 4)

局長1人であった第2編集局も今や3人となり、本部常住編集局として立派に (?) 機能できるようになった。予備軍がいま2人いて、もうすぐ5人になりそうな状況もある。次号を出すまでには10人くらいにふくれ上るやも知れぬ。だいたい、こちらの学生の冬はひまだから、ひま人が10人も集まって……

2局長：そうになったら、ほくとしても何が起こるかわかりませんしね。日本生物学会本部占拠なんて簡単にやれそうやし、とりあえず独裁会長団交でもやりますか。

会 長：本部占拠なんか毎日やってるやないか。団交もしょっ中かけられてるしな。

2局長：ほんまの団交いうたら、もっと怖いもんですよ。今のは、会長に我々が団交されてるみたいなものです。

会 長：団交というのは団体交渉の略で、大勢が1人をつるし上げることを言う。1人が大勢をつるし上げてても団交とは言わない。

2局長：それならそろそろ、日本生物学会第1回大会でも準備しますか。

会 長：そりゃいいね。会長あいさつくらい、してもいいよ。でも、会長あいさつのあと、だれもしゃべらんんだら、かっこうがつかんで。君らでやるんならともかく。

2局長：不名誉会員やら東大・京大の学生やら、スゴイ会員がいっぱいいますから、しゃべる人が多すぎて困るんやないですか。

会 長：甘い甘い。大体こんな学会にはいる奴は、たいてい向上心を失なって、世間を横目で見てるのが多いから、だれかがしゃべったらケチでもつけたろか、くらいしか考えとらん。自分からしゃべってケチつけてもらおうという、まともな奴はまずおらんで。

2局長：そんなもんですかねえ。まあ、原稿書く人も少ないですね。

会 長：君らも、占拠や団交や大会やと、つまらんこと言うてないで、原稿のひとつも集めてきたらどうや。それこそ編集局員のつとめやないか。

2局長：そやから編集後記2つも書いたやないですか。2人とも同じ事書いたのにはびっくりしましたけど。

会 長：あれは、君が第2編集局で恐怖政治をしいているという証拠やな。独裁は我が学会のシンボルやけど、君にはまだ独裁者の資格がないということや。

2局長：独裁者にも資格があるんですか。

会 長：あるある。権力的に脅迫して従わせるというのは、独裁者として下の下や。何にもせんでもみんなが勝手についてくるというのが、上の上の独裁者や。

2局長：みんなついてきてるんですかねえ。

会 長：半分くらいはちゃんと会費払ってるやないか。

2局長：それが不思議なんですよ。こんな学会に金を払う人がいるというのが。やっぱり怖いんですよ。会長が、たとえ何にもせんでも。

会 長：そんなことあるか。

2局長：だって、会長が、“あいつは好い奴や。わしと同じ考えや”と賞めたら、就職がつぶれるそうやないですか。

会 長：そりゃそうやなあ。次に書く本に、「2局長の協力なくしては、この本はできなかつたであろう」と、謝辞を書くことにしようか。

<< 真 正 編 集 後 記 >>

◎ 前号で、「次号は不名誉会員特集号にする」と宣言したが、その時すでにきていた1つ以外待てど暮せど原稿は来なかった。教授にまでなりながら当学会に入れてもらっているのだから、こんな時くらい少しは書けばいいものを、やはり教授を不名誉会員にしたのは正解であったと確信した。

◎ その代わり、不名誉教授から投稿があった。この人は、当学会不名誉会員第1号だったが、停年退職したあくる日に、「ワシは今日から職なし会員や」と言って100円置いていった人である。

◎ 次号は、100円会員特集号にしたい。“近ごろの若いモンは、文章を書かなさ過ぎる。よう書かんのとちゃうか”という、年寄り共の評価が固まりつつある。でも、私は決してそうは思わない。若者は、書く内容も豊富に持ち、それを表現するすぐれた文章力も持っている。ただ、書く気がないだけだ、と私は信じる。したがって、書く気さえ起こせば、たちどころに原稿はできる、はずである。〔だれも書かなければワシが独占する、と会長が言ってます —— 第2編集局長〕

◎ 海老人空耳氏の“読もうとすれば人をつかれさせるし、読んだとしても役に立たない”（エルトン、渋谷訳「動物の生態学」2ページ）力作論文のあとに、“ガン作会長・取締役談話”なる、人を惑わせるような会話がつけられているが、これは、当会会長ならびに編集局と、縁もゆかりもない全くのデッチ上げである。<編集局だよりの中の会話は本当ですか？ —— 2局員。あれは正真正銘のホンマや —— 会長。ちょっと信じられんなあ —— 2局員>

◎ では、皆さん、よいお年を。

（ 会 長 ）

日本生物学会誌 第21号 1985年12月20日

編集・発行 日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助

許可無断転載